

大学を飛び出し、
地域の人々と連携し
学んできた成果を
報告します。

2023年度 静岡大学 地域創造学環

フィールドワーク 報告書



第8回 地域創造学環フィールドワーク報告会の開催にあたって

2016年度の地域創造学環の開設とともに始まったフィールドワークは、県内各地の自治体、各種団体、専門家、市民のみなさまのご支援・ご協力により、地域創造学環生の多様な学びと成長の機会となってきました。2019年度から2021年度の3年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により活動に様々な制約を受けましたが、2022年度からは徐々に制約がなくなり、昨年度からは地域創造学環のフィールドワーク本来の姿を取り戻すことができました。本日、報告会を開催するにあたり、このような厳しい状況の中でも、これまでご支援・ご協力いただいたみなさまに、まずは厚く御礼申し上げます。

フィールドワークは、地域創造学環の教育プログラムの文字通りの「看板」です。新入生に「どの授業が楽しみか」とアンケートをとると、必ずフィールドワークが最上位にランクインしてきました。実際、学生たちがフィールドワーク先で様々な方々と出会い、話し、協働することで得る気付きは、その期待に沿うものだと実感しています。フィールドワークで見出した地域課題を卒業研究・卒業制作のテーマにする学生、就職活動の面接の際にフィールドワークでの経験を熱く語る学生、フィールドワークの中で自分の想いを確かにし卒業後の進路を見出す学生—こういう学生たちを多く見てきました。本日のフィールドワーク報告会でも、そういう学生たちの「未来の姿」の一端を見出していただけだと思います。

さて、すでにご存じのことと思いますが、本学は2023年度に地域創造学環を発展させるとともに他の6学部の教育成果を融合して新学部「グローバル共創科学部」を開設し、それにともない、2022年度を最後に地域創造学環の学生募集を停止いたしました。そのことにより、2022年度に入学した現在の新3年生が今年度末にフィールドワークを終えるとともに、大部分のフィールドワークが終了することとなります。地域創造学環の教育プログラムの「看板」であるフィールドワークを、今年度は今までより増して実り多いものにしたいと思います。皆さまには引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご指導いただけますよう、心からお願い申し上げます。

なお、地域創造学環のホームページ (<https://www.srd.shizuoka.ac.jp/>) には、学生たちが制作したフィールドワークの情報が数多く掲載されています。報告会・報告書とはまた違った一面も垣間見ることができると思います。ぜひご覧いただければ幸いです。

2024年5月30日

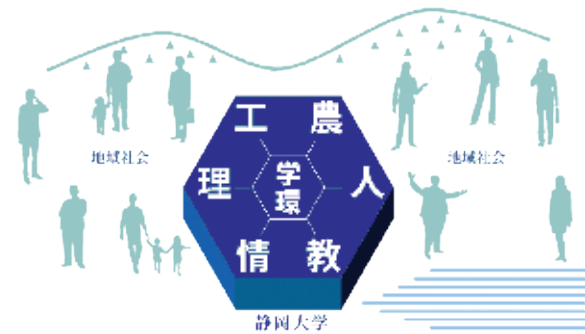
国立大学法人静岡大学
地域創造学環長
水谷 洋一

目 次

地域創造学環とは／フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ	3
2023年度フィールドワーク報告 ※報告内、学生の学年及び教員の職位等は2023年度で表記	
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 おまち	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館	14
浜松市 佐久間町	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町 商店街	22
松崎町 観光と防災	24
東伊豆町	26
伊豆半島全域（ジオパーク）	28
多世代の居場所づくり	30
学内地域連携拠点	32
2023年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声	34
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声	38

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、2016年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた全学学士課程横断型教育プログラムです。静岡大学のすべての学部（人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部）の授業を履修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域（フィールド）に飛び出し、より魅力的な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

現在15テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

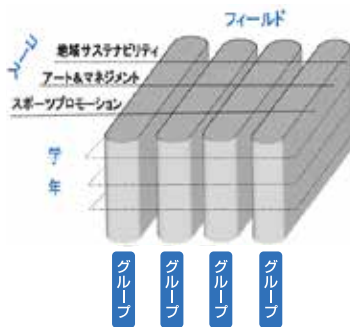
地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 3コースを融合したグループを編成し、異分野が結束して取り組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

コース融合のグループ編成

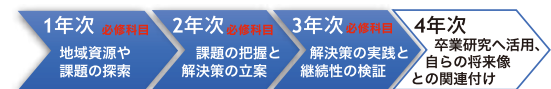
コース、入学年という枠にこだわらないグループ編成でフィールドワークを行っています。

※本報告書では、「地域サステナビリティ」の学生をコースの中の「地域経営」「地域共生」「地域環境・防災」の各分野に分けて記載しています。



フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわたり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組めます。



ビクトグラムデザイン:河村清加 半田颯太

地域創造学環のフィールドワーク／フィールドとテーマ

静岡市

清水港周辺地域

清水港周辺地域が“つながる”“ひろがる”“にぎわう”活動



おまち

おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出



多世代の居場所づくり

多世代の居場所づくりと防災教育の実践



庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化



浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出



焼津市

焼津市浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動



学内地域連携拠点

(静岡大学静岡キャンパス) 静大発 地域と大学の連携を広めよう！



伊豆半島全域（ジオパーク）

地域づくりとジオパーク



東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト



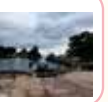
松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出



松崎町 観光と防災

防災と観光の両立



浜松市

浜松文芸館

私のまちの文芸世界



佐久間町

交流の輪づくり～新たな関係構築～



掛川市

田園空間博物館 南遠州とうもんの里

子どもたちを呼び込むための環境づくり



御前崎市

御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～



静岡市 清水港周辺地域

清水港周辺地域が“つながる”“ひろがる”“にぎわう”活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域環境・防災) 3年 小林芽吹

(アート&マネジメント) 2年 鈴木愛理

(スポーツプロモーション) 3年 大須賀祥真、新宮周馬

2年 日下部友香、西海土和花、平井朋美

指導教員：○准教授 石川宏之、教授 小二田誠二、教授 杉山康司

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

有限会社都市環境デザイン研究所

地域概要

清水港周辺地域は、駿河湾で水揚げされた新鮮な海産物を味わえる「河岸の市」や、観覧車や遊園地、映画館等も有する大型複合施設「エスパルスドリームプラザ」、清水港の歴史や、貿易の象徴であった缶詰産業等について学べる「フェルケル博物館」、清水次郎長の生家や清水港船宿記念館「末廣」など、魅力的な観光資源が多く存在する地域である。また、富士山が一望できる美しい景観、さくらももこさん原作の「ちびまる子ちゃん」の舞台、プロサッカーチーム「清水エスパルス」の本拠地など、多くの強みを持ち、大型外国客船の寄港による外国人観光客の存在など多彩な集客資源や多様な賑わいがある。

現在、当地域では人口減少や少子高齢化の地域課題と新型コロナウイルス収束による海外クルーズ船の再増加、集客施設整備により、地域と来訪者の交流や街なかへの人流対応が課題である。

これまでの活動

2021年度以前

清水港の課題を整理した上で、メンバーにスポーツプロモーションコースの学生が多いという特徴から、スポーツを活かした地域活性化を目指す案として清水港を舞台としたロゲイニング企画などの提案を実現性に向けて検討していた。

2022年度

スマイルロゲイニング開催に向け、準備を進めた。活動内容は以下の通り。

1. ポイント内容などルールの最終決定

2021年度に話し合った内容からさらに改良を加え、ポイント内容や実施方法などを実際にコースを歩きながら調整していった。協働の取組として企画段階から「清水おやこ劇場」さんにご協力いただき、内容についてアドバイスを頂いた。

2. 道具、マップ、マニュアル等の作成・リハーサル

イベント本番前に、「清水おやこ劇場」さんと実際にコースを歩いた。安全面での配慮や、内容の改善点、必要物品の確認を行った。そこから学生内で分担してクイズボードやスタッフマニュアル、ロゲイニングのポイントを集計するためのポイントカードなどを作成した。

3. 「スマイルロゲイニング」の実施

12月11日(日)に「スマイルロゲイニング」を開催した。「清水浜田小学校」をスタートとし、ゴールであるエスパルスドリームプラザ3階にある「ちびまる子ちゃんランド」までにあるポイント地点を巡り、クイズなどのミッションをクリアしてポイントを集める。そのポイントの合計を競うイベントである。多くの参加者に満足していただけたとともに、2023年度の活動課題が明らかとなった。



清水港周辺地域



話し合いの様子



イベント前準備の様子



イベント本番の様子

2023年度の活動について

1. イベントの企画・準備

昨年度のイベントの反省を生かし、今年度の計画推進をするために「NPO法人NPOサポート清水」さんや木村さんとの協働の取組を行いご助言等をいただいた。

まず、清水地区と浜田地区の連合自治会長さん、「清水おやこ劇場」さんをお招きし、意見交換会を行った。イベント内容についての意見をいただき、昨年度のイベント参加者アンケート結果を活かしながら企画を進めていった。話し合いの結果、次郎長通りをメインとした周辺地域で「スマイルロゲイニング2」を開催することに決定した。

ポイント地点の選定では「CAFÉ OEC」の大石さんをはじめとした次郎長通りに並ぶお店の方々や「望月自動車」の望月さんらにご協力いただいた。また、「松井町公園」をポイント地点に加え、ニュースポーツであるモルックを実施した。清水地区連合自治会長の隅倉さんには次郎長通りとその周辺を歩き回っていただき、移動するポイント地点としてご協力いただいた。

イベントの景品として、「静岡信用金庫」さんのノベルティグッズや次郎長通りにお店を構える「梅の家」さんで利用できる引換券、「CAFÉ OEC」さんのクッキーなど、いくつか準備した。

2. 「スマイルロゲイニング2」の実施

12月10日(日)に、「スマイルロゲイニング2」を開催した。「清水市民活動センター」をスタートし、各地点を回ってゴールの「美濃輪神社」を目指す。チームごとに回る順番を決め、各地点でクイズや写真撮影などのミッションに挑戦してポイントを集めるイベントである。運営スタッフとして「清水おやこ劇場」さんにもご協力いただいた。当日は、清水区広報キャラクターである「シズラ」の着ぐるみの見送りでスタートした。各地点を回り、全チームがゴールすると、結果発表と表彰を行い、景品を贈呈した。

イベント後の参加者アンケートで88%の方に参加してよかったとの回答を頂いた。

3. 反省

後日、「スマイルロゲイニング2」の反省会を行った。「清水おやこ劇場」さんにも文書にて反省点を頂いた。子供たちの様子や安全管理など、良いイベントだったと評価していただいた。しかし、協力店舗との関わり方やゴール後の時間の使い方などの点で改善できることも見つかったため、来年度に活かしたい。

これから取り組むべきこと

来年度で地域創造学環としてのフィールドワークは最後となる。先輩方や私たちがこれまで行ってきた活動をもとにして、形としてなにかを残したい。これまでに発見した地域資源や実施したイベントに関することなど、清水の魅力発信を目的として来年度の活動を行っていく。

スポーツプロモーションコースの学生やアートマネジメントコースの学生が所属しているグループであるため、それらの視点を取り入れたものをつくりあげたい。

地域創造学環



意見交換会の様子



最初の地点、シズラとの記念撮影



「魚初」中田さんとのスマイル写真撮影



ゴールにて、結果発表と表彰



参加者・スタッフの集合写真

静岡市 庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(スポーツプロモーション) 3年 狩生龍之介、刈谷奈々、法月優衣
2年 上田涼斗、木元朝陽、早乙女寛太
利根川悠太、西山拓真

指導教員：○准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、講師 平嶋裕輔

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人静岡市まちづくり公社
(清水ナショナルトレーニングセンター、清水テルサ)
庵原地区連合自治会

地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する町である。人口は約1万人で総世帯数は約3千世帯（連合自治会の数は19地区）である。庵原地区の特徴は、地区を囲う山々と、そこから眺望できる駿河湾の大海など素晴らしい自然にあふれていることである。また、傾斜があるため水捌けが非常に良く、そのような自然、地形を活かした産業も発展しており、特に、みかんやお茶の生産が盛んである。さらに、庵原球場や清水ナショナルトレーニングセンターなどのスポーツ施設が充実しており、プロサッカーチームや、プロバスケットボールチーム、海外の代表チームの合宿所となる。また、2023年には「くふうハヤテベンチャーズ静岡」という静岡県では初のプロ野球チームが設立された。同チームは庵原球場（ちゅ〜るスタジアム清水）を本拠点とし、活動を行っており、今日非常に注目を集めている。

このように庵原地区は、豊かな自然環境のもとで「食・スポーツ」が充実しており、貴重な資源のある地域といっていだろう。そして現在は、中部横断自動車道の開通に伴って、この地区に「道の駅」を開設しようという計画が立案されている。道の駅を作り、そこに多くの人が立ち寄り、庵原地区のことをさらに認知していただくことで、さらなる庵原地域の発展につながると考えられる。我々もこの計画に賛同し、「地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化」というテーマに基づいて活動を継続中である。



庵原町の景色

これまでの活動

・アンケート調査

連合自治会に加入している世帯へ、地域意識・行動とスポーツ活動との関連を問う大型アンケート調査を実施した。有効回収数は3,478だった。

- ①スポーツ活動自体は低調である
- ②地域意識（愛着等）は高い支持がある
- ③集団スポーツを行う人は地域満足度も高い

結果から、これらのことが分かった。スポーツによるコミュニティ形成を目指す場合、スポーツの取り組み方に留意する必要があると思われた。また、街づくりの意図を理解したスポーツ活動を行う事ができればコミュニティ形成が実現可能になるのではないかと。

・「清水いはら」のロゴマーク策定

制作目的として、

- ①「清水・庵原地区」の認知度、着目度の向上
- ②社会実験事業の有効性の向上
- ③「（仮称）清水いはら道の駅」の整備による庵原地区・清水区の活性化

が挙げられる。本ロゴマークは、アート&マネジメントコースの学生二人にデザインの作成を依頼した。我々は、モチーフや庵原の魅力を見つける現地調査や打ち合わせを行い、その後修正を加え選考会議にて最終決定された。この使用用途は、「清水いはらフェス」のポスターやチラシ、またホームページ、YouTube等のSNS、道の駅実行委員会の名刺等である。

策定されたロゴマーク→



2023年度の活動について

（１）清水テルサ健康フェスタでのブース出店、ステージ発表

ブローライフルのブースを出店した。この時体力測定の方法を考え、高齢者が気軽に体力等を測定し、数値としてわかるようにした。やり方の指導やアドバイス、ブローライフルの効果についても、発信した。また、1時間ほどステージ発表を行い、いつまでも健康で歩き続けられる筋力を維持するためのストレッチと筋トレ講座を行った。これには、たくさんの参加者にお越しいただき、大いに盛り上がった。



ブローライフルブース

（２）庵原フェスでスポーツイベントブースを出店

ノルディックウォーキングに関するイベントブースを出店した。受付やウォーキング方法の宣伝、コース案内を中心に行った。他にもコース内のポイントで、参加者とのコミュニケーションや安全に配慮した対策についても心がけた。コースの途中に人員を配置し参加者の安全管理を徹底して行った。連合自治会の協力のもと、住民の高いスポーツ意識に触れることができた。みかん農家の方からジュースをいただくなど交流をすることができた。



庵原フェスの受付

（３）「くふうハヤテベンチャーズ静岡」に関する討論会

2024年シーズンから「くふうハヤテベンチャーズ静岡」が、静岡県初のプロ球団として活動することが決まった。静岡市清水庵原球場を本拠地とする球団ということで庵原町を主なフィールドとしている我々が、「くふうハヤテベンチャーズ静岡」とはどのような球団であるのか、今後この球団に何を期待するのかについて学生間で意見交換を行った。今後静岡県の人々のみならず、静岡県外の人々にも知ってもらえるような球団になってもらいたい等の意見が出た。そのために、「くふうハヤテベンチャーズ静岡」と庵原町が協力し、球場に庵原町についての告知や庵原町の魅力を知ってもらえるようなブースを設けるなどの活動を行い、庵原町と一緒に盛り上げてほしいという意見が出た。また、この球団名には「くふう」で静岡の暮らしに「ひらめき」と「喜び」を生み出す球団へという想いが込められているためこの球団から新たな発見をし、地域の人々が笑顔になれるような活動を行ってほしいなどの願いもあった。



討論会の様子

これから取り組むべきこと

（１）スポーツによる庵原地区の地域活性化事業の検討

主に庵原住民を対象としたスポーツイベントの開催・参加をしていきたい。清水テルサにて2023年度に開催された「健康フェスタ」では、あまり認知度がないスポーツながらも参加してくださる方がおり、健康への関心が非常に高いことを実感した。こうしたアプローチを庵原住民に対しても積極的に行っていきたい。

庵原フェスについても継続的に参加していきたいと考えている。ウォーキングブースの出店に加え、今まで同じコースでこのイベントを行ってきたため、参加者に飽きられないような工夫（ポップや案内板作成など）を行っていきたい。

（２）スポーツ教室の参加

2023年度は清水区庵原町に位置するナショナルトレーニングセンターで行われているスポーツ教室の一つ、「ズンバ」の教室に参加させていただいた。ナショナルトレーニングセンターでは月ごとに予定を立て様々なスポーツ教室を定期開催しており、若い年代からご高齢の方々まで幅広い層で受け入れられている。今後はこういった活動への積極的な参加を目指し、地域住民とのつながりや、どのような活動が求められているかなど、近い距離での声を聴けるように準備をしっかりと行っていきたい。

静岡市 おまち

おまちを中心とした静岡市内のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 山口誠人、2年 井上文誉、冲山寿幸
(アート&マネジメント) 3年 外木未夏、日名子ゆり、2年 漆畑璃々花

指導教員：○講師 原瑠璃彦、客員教授 平岡義和

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

静岡おまちバル実行委員会

地域概要

◆静岡おまちバル

「おまちバル」とは、「おまち」と呼ばれる呉服町、両替町、七間町、常盤町、紺屋町を中心に開催されるイベントである。静岡市に飲食店が多いことに着目し、それらを地域資源として捉え、ブランディングによる地域振興を図る取り組みとなっている。現在はおまちだけでなく、草薙、清水、用宗とも連携した「オール静岡バル」としてイベントを行っている。



静岡おまちバルのロゴ

これまでの活動

このフィールドでは2020年度まで駒形通商店街でも活動を行っていたが、2021年度からはおまちバルでの活動に専念することになった。

◆2021年度の活動

●オール静岡春バルWeek2021

静岡のおまちで毎年2回開催されている「静岡おまちバル」の実行委員会の方々と共同で「オール静岡春バルWeek2021」に参加した。静岡県立大学や常葉大学の学生とチームを組んで、より多くの学生や若者に向けてプロモーションを行った。

●静岡クラフトビアバル

秋に開催予定だったバルが中止になったことを受け、2021年11月から静岡クラフトビアバルでの活動に参加させていただいた。静岡市内の3つのクラフトビール醸造所（ブルワリー）に取材を行い、記事作りに取り組んだ。作成した記事は静岡クラフトビアバルのホームページにて、「静岡のクラフトビール探検プロジェクト！静大地域創造学環メンバーによるブルワリー取材」(https://www.shizuokacraftbeerbar.com/複製ークラフトビール研究所)として掲載していただいた。

◆2022年度の活動

●学生主体でのバル企画

これまで参加してきたバルイベントでの経験を踏まえて、学生や若者をターゲットにしたミニバルを学生メンバーで計画した。「スイーツでおまちを楽しむ」をコンセプトに、参加店舗等を検討していった。お酒が飲めない人でも楽しめる「スイーツ」を通じて、若者目線でおまちを楽しむことができるバルにし、大学生や若者のバルへの参加の促進を目指した。学生主導でバルを運営することで、バルへの理解をさらに深め、今後のバル運営に還元していくことをねらいとした。

イベント名を「秋の甘味巡りースイーツ小町」とし、「オール静岡秋バルWeek 2022」の枠内で開催させていただいた。バルの準備期間と開催期間では、店舗開拓、学割チケットの販売とフライヤーの作成、Facebook・Instagramでのプロモーション、また、例年と同様におまちバルでの抽選会などのお手伝いをさせていただいた。

このミニバルでは、従来の実行委員会の方々が主催するバルイベントに参加する形に加え、学生が運営の主体となるイベントを目指した。今回の活動は、コンセプトに適した参加店舗の選び方や、こういったプロモーションがターゲットに向けて効果的なのかなど、イベントを運営する際のノウハウを学ぶ貴重な機会となった。



学生が醸造所を取材する様子（2021）



スイーツバルのフライヤー（2022）

2023年度の活動について

◆SNSでのプロモーション

活動当初より、おまちバルの参加者の年齢層が高く、若年層の参加が少なかったことが課題として上がっていた。そこで、学生側でスイーツなど若者にに向けたコンセプトバルの企画をしたり、若い世代の使用率が高いSNSでの投稿を工夫したりすることにより、この課題への解決を試みた。

2023年度以降、学生チームからのおまちバル運営人数が減ってしまう関係で、少人数で学生がバルに寄与できることを考え、SNSをメインとした広報を通じ、おまちバルの認知度を高めていくことを活動方針とした。これまでの活動では、Facebookなどテキストを主体とした情報発信が多かったが、画像や動画を使って、視覚的にわかりやすく発信することに適したInstagramをメインの発信媒体として活用していくことにした。

また、おまちバルの楽しむ方法の発信として動画を作成し、公式YouTube、公式HPにアップロードした。

●第23回静岡おまちバル（前期）

「第23回静岡おまちバル」に参加する店舗を対象に、お店の人へのインタビューを通して、料理・商品の紹介をしたり、店内の雰囲気が分かる写真を上げたりするといった投稿を行なった。取材対象となる店舗は、おまちバル実行委員会の方の意見もあり、これまでバルに参加してきた店舗の中で売り上げがトップの店舗とした。インタビュー内容は、まずチケットで購入することができる、バルメニューとして指定されている料理について聞き、そこから調理方法や調味料へのこだわり、客層など話を展開していくようにした。学生メンバー1人につき3店舗取材し、対面またはオンラインで各自行った。

事前にテーマに適した質問を考えるなど、2021年度に実施したクラフトビアバルでの取材の経験と通じる部分もあったが、今回はチームで1店舗を対応するのではなく、1人で複数のお店とコンタクトを取る必要があったため、店舗側と上手く連携が取れなかったことがあった。

また、動画作成の為、4店舗ほど実際に来店しその様子を撮影した。客として動画撮影する中で新たな楽しみ方や魅力を発見した。

●静岡秋バルめぐり2023（後期）

春季に開催された「第23回静岡おまちバル」で投稿した際と同様に実行委員と協力しながらSNSを使った取り組みを続けた。前回の反省点として、投稿に統一感がなかったことが挙げられた。その対応策として、デザイン班、取材班と役割分担をし、どのような投稿をするのかフォーマットを準備してから投稿する方針とした。前回は投稿のサムネイル（表紙）にばらつきがあったが、今回は統一感を出し投稿を見やすくした。

バル開始前にバルの楽しみ方動画を作成し、チケットの購入方法から、当日の流れまで解説した動画となっている。

地域創造学環



Instagramのプロフィール画面（2024）



投稿した画像



作成した「バル楽しみ方動画」



おまちバル抽選会の様子（2023）

これから取り組むべきこと

今後もSNSでのプロモーションを継続して行なっていくが、次年度からはインスタマーケティングのプロ（企業）と学生が提携し、おまちバルと企業の共同運営アカウントとして新規のアカウントを立ち上げ、運用していく見通し。イベント時以外の期間でも恒常的に運用する。具体的な運用方針としては、新規にアカウントを立ち上げ、参画飲食店の紹介をメインに行っていくことを予定している。

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの
(地域経営) 3年 上村崇、2年 大森彩、鈴木琉斗
(地域共生) 3年 井出綾乃
(地域環境・防災) 2年 藤井陽真利
(アート&マネジメント) 3年 鈴木唯心、桒木彩花
指導教員：○准教授 川原崎知洋、客員教授 平岡義和
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡浅間通り商店街振興組合

地域概要

浅間通り商店街は、静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ600メートルの「浅間通り」に存在する。かつては浅間神社の門前町や駿府城下町として静岡の産業や流通の中心地であり、現在も歴史ある老舗店から新しいお店などが建ち並んでいる。通信販売の普及などによる客の減少で20年ほど前から衰退が始まり、人通りは少なくシャッターが下りたままの店もあったが、昨今、若者をターゲットとした新規出店も多く、利用者の増加がみられる。

毎年10月には静岡とタイの交流事業として、この地に生まれタイにわたって活躍した「山田長政」にちなんだ長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。6月に浅間神社で無病息災を祈るために行われる「夏越大祓式・大茅の輪くぐり」に合わせて浅間通り商店街で開催される輪くぐりさんや、毎月1日に浅間神社で行われる安倍の市、お正月の商店街なども地元の人が集まり賑わい創出の場となっている。浅間神社では徳川家康が元服式を行ったとされ、大河ドラマ「どうする家康」に関連して商店街では家康にちなんだ新商品の開発、イベントが行われていた。

これまでの活動

足元灯飾りの設置

足元灯とは商店街の歩道に設置された照明器具で、その上部には展示台がある。2021年度まではコロナ渦で実施できなかった長政まつりを行いたいという商店街の願いを込めた飾りと、雛飾りの2つを制作した。2022年度はディスプレイデザインの製作などは行わず、シーズンが過ぎた展示物の撤去や清掃にとどまった。

長政まつりへの参加

2022年度では、山田長政と結びつきが深いタイの遊び「クワールークポン」と、2021年度同様、チョークを使った「地面におえかき」の2つを企画・運営した。

輪くぐりさんへの参加

2022年度は、足元灯を活用した「クイズラリー」と、こどもたちの思い出に残るよう「フォトスポット」を企画・運営した。

Instagramの運用開始

2022年度から、商店街の魅力を伝えるためにInstagramの運用を開始した。毎週水曜日に商店街の風景・グルメ・イベント等をテーマに、フィールドワークのメンバーが投稿した。



平日の商店街



長政まつりの様子

2023年度の活動について

長政まつりへの参加

2023年度は「カイエーン・パラット」というタイの遊びを少し改変し、輪投げとけんけんぱを組み合わせたような遊びと、昨年度同様チョークを使った「地面にお絵かき」の企画を行った。休日ということもあり、沢山のこどもたちが参加してくれたり、地面にお絵かきでは中高生や、家族連れの保護者様も参加してくれたり、さまざまな住民の方との交流ができた。

輪くぐりさんへの参加

今年度は、浅間通り商店街について詳しくなってもらえるような「クイズラリー」、こどもたちの思い出に残る「フォトスポット」、祭りの名前になぞらえて「輪くぐりんボー」を企画・運営した。企画した遊びに参加してくれたこどもたちには、サイリウムで光るリストバンドをプレゼントし、多くのこどもたちに喜んでもらうことができた。輪くぐりんボーの企画については、話し合いの段階で行うにあたって必要なものや、転倒する恐れなどの安全性について意見をすり合わせての実施であった。

報告会の開催

6月には、浅間通り商店街振興組合総会の後に、商店街の方々に、フィールドワークで取り組んできたことや気づいたこと、学んだことなどを報告し、2022年10月に浅間通り商店街の店主様を対象とした質問紙調査の結果を共有した。商店街の方々に地域創造学環のことやフィールドワーク活動の内容を知っていただく良い機会となった。

Instagramの活用

商店街の魅力を伝えるために、若者を中心に利用者の多いInstagramを活用している。2023年2月から7月までの約半年間、商店街の風景・グルメ・イベント等をテーマに、フィールドワークのメンバーが投稿を続けた。その後話し合いの末、後期からはミーティングや浅間通りでのフィールドワーク活動の実施ごとに活動した内容を投稿する運用方法に切り替えた。(36投稿 121フォロワー 2024年3月26日時点)

「浅間通り商店街フィールドワーク(静岡大学)」 @sengen_fw
https://www.instagram.com/sengen_fw/



長政まつり
地面にお絵かきの様子



輪くぐりさん
フォトスポットの様子

これから取り組むべきこと

商店街の方との交流

輪くぐりさんや長政まつりなど、多くの人々が関わるイベントづくりのプロセスを通じて、商店街の方々や地域住民の方々と積極的に交流したい。

イベントの企画

次年度も輪くぐりさんや長政まつりが開催される予定である。地域の子どもがたくさん集まるようなイベントを企画立案し、フィールドの人数が減ることもあるため、早期から準備を行いたい。

足元灯ディスプレイデザインの継続・更新

足元灯ディスプレイデザインの継続・更新を行う。昨年度はデザインの更新が出来なかったという反省を踏まえ、現在は、富士山をテーマとしたディスプレイを学生が製作途中である。

Instagramの活用

若者をターゲットに浅間通り商店街の魅力を発信していきたい。フィールドワークの活動ごとに更新を行うことにより、我々の活動内容や浅間通り商店街の魅力を多くの人に知ってもらえるようにしたい。



Instagramのプロフィール画面

焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 三村花
(地域共生) 3年 田畑晴花
(アート&マネジメント) 2年 宮城羽那
(スポーツプロモーション) 3年 小名陽日、長瀬裕哉、2年 大石凜里花、大澤美潤
指導教員：○教授 太田隆之、教授 国京則幸

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

焼津市行政経営部政策企画課
焼津市経済部商工観光課
NPO法人浜の会
静岡県立焼津水産高等学校
やいづ観光案内人の会

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に形成された、南北に1kmほど続く集落である。集落内には、かつて運河としても機能した堀川が北へと流れている。浜通りエリア内は、北浜通・城之腰・鯛ヶ島の3地区に分かれおり、魚商人が築いてきた沿岸部特有の伝統的な家屋や、小路などの焼津市の歴史と文化が豊富にある地域である。

例として、明治時代に怪談小説で名の知れた小泉八雲が滞在し、多くの作品をこの地に残した。また、歴史的資産だけでなく、地区ごとの夏祭りや、市民の皆さんが描いた行灯が夏の夜を照らす「あかり展」などの伝統的な行事が多く存在しているが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加者が減少傾向となっており、存続が危惧されている。

また、浜通りの町並みの保存や活性化を目指して、行政と住民が連携し浜通り活性化フォーラムなどの活動が行われている。本フィールドでは、NPO法人「浜の会」、焼津市観光協会、焼津水産高校、ゲストハウス「帆や」をはじめとした皆様の協力を得ながら、活動を行っている。

これまでの活動

①焼津水産高校とのワークショップ

焼津水産高校の学生たちと撮影した「浜通り周辺でのインスタ映え」をテーマにした写真をもとに、若者向けの魅力発信の際にどのような写真が有効か、焼津水産高校の学生とグループワークを行った。話し合いの中で、古き良き浜通りの町並みの魅力をもっと発信すべきという意見や、そのような町並みの中でも新たな魅力ができたといった意見が出た。

②あかり展の準備＋参加

準備では当日使う行灯づくりの手伝いをし、集まった方々の地元愛の高さを改めて感じたとともに、自分たちがどのようにに関わり、浜通りの活性化のために向けた取り組みが行えるか改めて考える必要があると感じた。コミュニティの場になっており、家族ぐるみで話す様子などがうかがえた。

③浜通りのまち歩き

1年生が初めて参加した時は浜通りのまち歩きを行った。昔の地図と現在の町並みを見比べながら、1年生は浜通りの現状を知り、2・3年生は改めて浜通りの課題を認識する機会になった。また、1年生たちは全員焼津出身の為、これまで学んできた地元史とも改めて比較しながら現状把握を行うことが出来た。



ゲストハウス「帆や」



ワークショップの様子

2023年度の活動について

①浜通りでの「あかり展」の準備・開催

今年度はコロナ禍を経てから初めて従来通りの規模で実施するあかり展となった。その状況下で、準備期間では行燈を制作し、当日はその点検や同時開催されたイベントの呼びかけ・会場設営を行なって回った。実際に長期間参加することによって、「あかり展」に臨む地域の皆さんの取り組む姿勢や、その思いを把握するとともに、当日の人出の多さや賑わいを体感した。普段の浜通りでは人の行き交いがあまり見られないが、当日は多くの人々が来場してマルシェなどに向かっていき、行灯が並ぶ中通りをゆっくりと歩く光景を目にすることができた。後日開催された報告会では当日の開催状況を踏まえ、浜通り地区での活性化の可能性があることやこれからの改善点などを提言させていただいた。

②焼津市内外との若者との交流と意見・情報交換

9月に「わたしの商店街クエスト」の最終報告会と、11月に「わかものまちサミット2023」に参加した。これらの事業は両者とも地域団体や町おこしに関心のある人々と若者たちが意見を交流し、若者を中心としたより良い町おこしについて検討する機会となった。

浜通り地区では市内他地域よりも早く少子高齢化が進んでいることを踏まえてこの企画に参加することで、各地の事例やそれらの意義や課題についてや、こうしたことを可能にするための団体や取組み・支援など、いくつかの条件がありうることを把握した。

③「海業振興モデル地区」である沼津市戸田漁港・地域の取り組みの調査

浜通りでの漁業やその関連産業をベースにした活性化の可能性を検討する上で、水産庁が取り組んでいる「海業」の振興を参考にするために、「海業」のモデル地域に指定された戸田漁港・地域でお話を伺った。

戸田地域では今の浜通りと同じく、人口減少・若年層の流出問題に直面し、主要地場産業である漁業にも影響が出たという。今回はその状況を打破するために取り組んだ具体的な内容や成果と課題についてご回答をいただいた。こうしたことに取り組んでいくには関係団体間の連携が必要であり、何よりも食事処が複数あることが基礎的な条件であることを把握した。

これから取り組むべきこと

①浜通り地区の水産加工事業者の皆さんへの聞き取り調査及び内容と潜在的可能性の把握

→本事業では十分に実施できなかったものの、浜通りには「なまり節」やだしを製造する事業者があり、水産加工を体験する企画に参加する事業者がいるなどの情報を得た。これまでの活動から浜通り地区に食事処がないことが課題の1つであると考えてきたことから、事業者の皆さんと意見交換も行いながら学生・若者目線でこの地区における食の可能性を検討したい。

②住民向けの活動拠点の形成を検討

→今年度の活動を通し、日常の中で賑わいを形成していくことが大きな課題となると私たちは感じた。そのため、まずは浜通りの中に住民の皆さんが気軽に立ち寄って交流できる食事処などの設置をするべきだと考えた。ゲストハウスである「帆や」と補完的であり、価格帯がさほど高くない食事処など、条件を踏まえた新たな住民向けの活動拠点を提案していきたい。

これらを通して、「海業」を核とした地域づくり・誘客の可能性も検討していくが、それよりも先に、まずは浜通り地域で活動している水産業関係者の現状を理解するところから取り組んでいきたい。



あかり展の様子



戸田港の様子

浜松市 浜松文芸館

私のまちの文芸世界

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(アート&マネジメント) 3年 田中奏大

2年 白田奏美、小笠原凜、山本陽大

指導教員：○講師 占部史人、講師 立花由美子

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

浜松文芸館は、平成27年よりクリエート浜松内の4階および5階フロアの一部に移転し、リニューアルオープンした施設。

館内では浜松市や遠州地方ゆかりの文芸作家の資料を収集・保存し、収蔵品の常設展・企画展を開催している。身近に文芸を学ぶ・楽しむ場、文芸に触れ、多くの人々と語り合う場にふさわしい環境づくりを進めている。

これまでの活動

①広報活動

浜松文芸館の知名度向上を目的として、ポスターやチラシの作成を行った。特にポスターは新聞にも掲載され反響を呼んだ。また、取り組んだ活動についての資料を施設内のショーケースに掲示し、毎年更新している。

②ワークショップの開催

若者に文芸の楽しさを知ってもらうために、これまで3つのワークショップを開催した。

1. 対象を年齢ごとに分け、中高生には合作俳句、小学生には宝探しや物語の穴埋めを中心とした年齢ごとの企画を行なった。
2. 言葉に対して親しみをもってもらうために、「七夕と俳句」をテーマにワークショップを開催した。小学生が考えた願いのこもった夏の俳句を、短冊に書いて飾るというイベントで、子どもたちに俳句を楽しんでもらうことができた。
3. 2年間連続で開催した「吟行DEススめ」では、「吟行×浜松×マップ」をテーマに、オリジナルマップを作成した。まち歩きを通して浜松の魅力を再発見することができた。

③俳句ガチャの設置

「俳句ガチャ」とは、「合作俳句」を気軽に体験できる企画である。クリエート浜松の1階と5階にガチャを設置することで、浜松文芸館への来場者を増やすことができた。リピーターの獲得もでき、今後もガチャの設置を維持していく予定である。

④オリジナルキャラクターの作成

浜松文芸館のキャラクターとして、「俳人（はいと）くん」と「ことばちゃん」を作成した。俳人くんは等身大パネルも展示されている。

⑤クリアファイルと冊子の作成

浜松文芸館や合作俳句、オリジナルキャラクターの説明が載っている冊子と、冊子の表紙が動いて見える「スリットアニメーション」を楽しめるクリアファイルを作成した。



クリエート浜松



ショーケースの掲示



俳句ガチャ



オリジナルキャラクター

2023年度の活動について

展覧会「Contemporary (Haiku) Art—現代(俳句)美術—」の開催

これまで文芸館でのフィールドワークを通して、俳句ガチャや吟行マップのワークショップなど、たくさんの俳句や文芸に関わる活動を行って来た。そして私たちは、「五・七・五」の17文字に言葉を限定して鑑賞者に状況や感情を想像させる俳句の魅力を感じた。また、文芸館フィールドメンバーの全員がアート&マネジメントコースの学生であることから、俳句とアートを融合した表現ができなかと考えた。そこで作品説明のキャプションの代わりに、それぞれが自分の作品に対して俳句を詠み、より自由な美術鑑賞を目指す展覧会「Contemporary (Haiku) Art」を開催した。

〈展覧会概要〉

展覧会名：「Contemporary (Haiku) Art」

会場：浜松市鴨江アートセンター 1階103号室

2023年11月10日(金)・11日(土)・12日(日)の3日間開催

鴨江アートセンターでは、現代美術を中心とした展示をおこなっているほか、地域住民の文化交流の場として使用されており、10代～30代の若者の利用者が多い。アートを通じて若者にも文芸の良さに触れてもらおうと今回の展覧会会場に選んだ。

〈展覧会に向けた準備〉

◆施設予約、展示場所の下見

◆展示作品・俳句の制作

◆展覧会チラシ・展示見取り図・展覧会の説明パネルの作成、チラシの配布 等々準備作業が多いため、これらが円滑に進むように連絡確認やミーティングを何度も行った。

私たちは鑑賞者にも俳句を詠んでもらい、今までにない鑑賞の仕方を味わってもらうことが大事だと考えた。そこでチラシのタイトル部分を切り離して裏面に俳句を書けるスペースを持たせるチラシを制作した。

また、展覧会前のフィールドワークでは、文芸館で開かれた「楽しいお話づくり講座」にお手伝いとして参加し、地域の子ども達から展示予定の作品について感想を聞く場を設けた。子供たちの積極性や純粋な発想は自分達の作品について改めて考える良い機会となった。

〈文芸館の展示〉

「Contemporary (Haiku) Art」を終え、文芸館へ訪れた方々への成果報告として、館内の掲示板に展覧会資料を掲示した。掲示板からでも展覧会の雰囲気を感じられるように、展覧会の説明パネル、観覧者の俳句、作品の写真とその俳句を展覧会の配置通りに展示した。

〈展覧会の反省〉

展覧会「Contemporary (Haiku) Art」を開くことによってどのような成果を得ることができたのか、ミーティングで振り返りをした。

◆良かった点

- ・30～40名ほど多くの来場者があった。
- ・チラシから興味を持って来てくれた人がいた。
- ・来場者が俳句を読むために作品について深く考えてくれた。

◆改善点

- ・「自由律俳句」と明記した方が、俳句に詳しい人にも親しみやすく、より美術と俳句の結びつきを強められた展示になる。
- ・コンセプトやデザインの方向性をあらかじめ共有した上でチラシなどの制作に取り掛かるようにしたい。

これから取り組むべきこと

来年度の活動では、これまでに浜松文芸館で行って来たフィールドワーク活動や、展覧会「Contemporary (Haiku) Art」の様子をまとめた図録を刊行する予定である。

地域活性化事業の一事例として、今後の参考とされるような図録を作成することを目指している。



展覧会の様子



作成したチラシ（表・裏）



館内掲示の様子

浜松市 佐久間町

交流の輪づくり～新たな関係構築～

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 2年 桑名瞭徳
(地域共生) 3年 河野美奈、2年 金城奈津希
(アート&マネジメント) 3年 大草実優、眞野瑤子
2年 大木琴寧、佐藤萌

指導教員：○准教授 祝原豊、教授 江口昌克、教授 正木祐史、教授 板倉美奈子

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

浜松市天竜区佐久間協働センター
佐久間パンプキンレディース
浜松山里いきいき応援隊（地域おこし協力隊）

地域概要

佐久間町は1956年、昭和の大合併により1町3村が合併して誕生し、さらに2005年には浜松市と合併したことで現在の浜松市天竜区佐久間町となった。人口は2,615人（令和6年3月1日現在）である。

浜松市北部、天竜川の流域に位置し豊かな自然とそれを利用した「佐久間ダム」や「蕎麦」などの名所・名産が特色。郷土を活性化させたいとアクティブに活動する方が多く、NPOや地域団体活動が盛んであり、多くの常設的な活動やイベントが行われている。

その中でも名産品が並び数多くの人が訪れる地域最大のイベント、「フェスタさくま」は新型コロナウイルスの影響で近年はオンライン開催となっていた。しかし、2023年より再び現地開催となり、以前と変わらぬ大きな盛り上がりを見せた。

少子高齢化や人口減少などの問題は存在するが、それに負けず人の温かさを感じ、地域内の交流盛んな一体感のある地域である。

これまでの活動

【交流の輪づくり】

佐久間めぐりやイベントを通して出会った方々との関係を築き、様々な方々と交流を行った。私たち発の活動や魅力発見、これまで地域で行われてきた活動への参加など現地の方々と交流の輪を作り人と関わるからこそできる活動を行った。

【サクッとさくま制作】

観光スポット・食べ物・人など、テーマごとに情報を詳しくまとめた広報誌サクッとさくまを作成。記事には地域の方へのインタビューや活動内容を掲載し、大学生視点での佐久間の魅力を取り上げている。完成品は印刷の上、佐久間の図書館や交流センターに設置させていただいている。

【SNSの広報】

Instagramを利用して広報活動を行った。静岡大学の学生や佐久間フィールドに興味のある方をターゲットにして活動報告と佐久間の紹介を投稿した。

【佐久間巡り】

佐久間ダムのような観光スポットのほか、街歩きを実施することで佐久間の魅力を探した。



佐久間ダム



Instagram

佐久間フィールド
Instagram



2023年度の活動について

【秘密基地いもほり】

元浜松山里いきいき応援隊の方が活動しておられる山間部のスペースで家族連れを対象としたイベントの企画・運営を行った。

4月から現地を訪れる中で、場所の視察、イベント運営の手伝い、学生主体のイベント企画・運営と段階を踏み様々な方々との関わり方を学んだ。

モルックや看板づくりなど子供向けのイベントを主に行い、世代をまたいで佐久間の魅力を伝える活動を行った。

【サクッとさくま】

2023年度も昨年度までに引き続きサクッと佐久間の制作、配布を行った。前述の秘密基地いもほりでの活動を主なテーマとして扱った。

【まち探検】

佐久間町の中でも浦川という土地のまち探検を行った。これまで関わりが薄かった地域を訪れることで新たな交流の輪を広げた。

【ごまちゃんづくり】

佐久間でお菓子作りなどの活動を行っておられるパンプキンレディースさんと一緒に、郷土のお菓子であるごまちゃんづくりとインタビューを行った。前回一緒に活動したのが2020年度であり、2年ぶりに共同で活動することができた。

これから取り組むべきこと

【テーマの継承】

佐久間フィールドは「交流の輪づくり」をテーマに掲げて活動を続けてきた。これまでの活動を通して様々な方々と関わりを持ち、交流の輪を広げてきた。

しかし、来年度以降のフィールドワーク活動はこれまで通りの形での存続は厳しく、場合によっては中途半端な形で終わってしまうことが危惧される。

そこで今年度は新たな関係を築くよりも、これまでに培った関係性をより密なものにすることで来年度以降も形や記憶に残るような活動を行ってきたい。

【主体的な活動】

これまでのフィールドワーク活動では、佐久間の魅力発見とそれを基にした広報誌サクッとさくまの刊行、地域の方のイベント運営に手伝いとして参加するという形が多く主体的な活動に充てることのできた時間が少なかった。

2023年度はこれを反省点として、これまでの活動の中で得た経験や人との関わりなどを活かした主体的なイベントの企画・運営を行うことができた。

しかし、まだまだ外部の方々に多くの協力を頂いての開催であり改善することのできる点が多い。今年度はこの反省を踏まえ、より自分たちが誰に向けて何をしたいのかを突き詰め、地域にとって必要な活動を行っていきたい。

【広報活動】

佐久間フィールドでは、広報の方法としてInstagram、サクッとさくま、チラシを用いている。しかし、まだまだイベントの参加などを静大ではなく協力者の方々の情報発信で知するという方が多い。今年度は広報の方法をより分析したうえで、より届けたい人々に情報を届けられる方法を探していきたい。



秘密基地いもほり



イベントポスター



サクッとさくま

田園空間博物館 南遠州とうもんの里

子どもたちを呼び込むための環境づくり

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 川野桂汰、2年 岩田啓佑
(地域共生) 3年 阿部ひなた、2年 今西志帆、西村愛未
(アート&マネジメント) 2年 石上すみれ
(スポーツプロモーション) 3年 宮下真彩、三國花、2年 市川菜々
指導教員：○講師 川崎和也、教授 池田恵子、講師 彭宇潔
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

NPO法人とうもんの会
蓮舟寺のみなさま

地域概要

「田園空間博物館南遠州とうもんの里総合案内所」(以下**とうもんの里**)は、掛川市の南西部にある施設である。掛川市・袋井市・磐田市の南部に広がる田園地帯を「とうもん」と呼ぶ。「とうもん」という言葉は、「稲面(とうも)」または、「田面(たおも)」がその由来とされている。美しい田園風景や豊かな自然、温かい地域の人々、伝統ある農村文化がとうもんの里の魅力である。

とうもんの里を運営するのが、2006年に地域住民らが中心となり設立した「NPO法人とうもんの会」である。とうもんの会は、とうもんの里を拠点に、農業体験、食加工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農産物・加工品のPR販売などの活動を行っている。こうした活動を通して、地域の農業や農村の魅力を伝え、とうもんの里を訪れる人々のふれあいを創り、農業の保全や地域活性化につなげることを目的としている。



とうもんの里の風景

これまでの活動

田園風景の保全と農村の伝統文化の継承などを目的に活動するとうもんの会では「**農業を知らない子どもたち**」を活動のターゲットのひとつにしており、次世代を担う子どもたちをいかに巻き込むかが大きな活動のひとつである。こうした課題を背景に、とうもんの里フィールドワークでは、「**子どもたちを呼び込むための環境づくり**」というテーマを掲げて、フィールドワークに取り組んでおり、地域の歴史、自然、伝統文化、農業、人々の暮らしといった、遠い昔から受け継いできたふるさとを「**農業を知らない子どもたち**」に繋げていくために、とうもんの里を通して地域の魅力発信を行ってきた。



キッズフェス

とうもんの里に子どもたちを呼び込むためにキッズフェスを行っている。自然が豊かなとうもんの里で子どもたちが楽しく活動し、思い出に残るようなイベントを目指している。

夕食作り

とうもんの里でお世話になっている名倉さんからの料理の豆知識を教わりながら、全員で協力し、とうもんの里の直売場で売られている地元の食材を使い夕食を作った。



報告会

毎年フィールドワークの最終回に地域の方々を対象として行う報告会。地域の方々にとうもんの里フィールドワークの活動と1年間協力の感謝を伝える。



2023年度の活動について

前年度まで年に1回だったキッズフェスを、2023年度は夏と秋の2回行った。これは前年度に感じた、子どもたちと関わる機会を増やしたいという思いから実現された。企画・準備段階では、企画の練り方、チラシの作り方の講座を受け、それらを生かして取り組めた。

【夏のキッズフェス】

夏休み中の小学生・未就園児を対象としたイベントで、夏の思い出づくりをテーマとして行った。午前中は宿題に取り組み、昼食はみんなでそうめんを食べ、午後から水遊びを行った。子どもたちからも楽しかったという声や、保護者の方から参加した子どもたちがとても楽しんでいて、秋のキッズフェスも参加したいという声をいただいた。また、保護者の方から子どもを預けることができる仕組みが好評だった。一方で、水遊び後の着替えに関して準備不足の反省があった。

【秋のキッズフェス】

子どもたちに農村の魅力を伝えたいという思いから、自然の中で体をたくさん使う遊びができるようなイベントを目指した。昨年度の反省から、フィールドワークのメンバーが少なくなっていくことを見越した運営方法や、フィールドワークが終了後も、とうもんの里に子どもたちを呼び込むための環境をつくるという「イベントの継続」が課題となったが、他団体と連携してイベントの企画実施を行ったことで、課題解決につながっただけでなく、イベントをより良いものにすることができた。具体的には、常葉大学こども健康学科のボランティアサークルである「SUN & leaf」との連携により、運営の人数を大幅に増えたことでより多くの集客が可能になっただけでなく、子どもに関するイベントを実施された豊富な知識や経験から企画がより良いものとなった。また、掛川市を拠点とし地元の食材と使用した料理を作り提供する「だれでもごはん」との連携により、地域の文化に沿ったおいしい昼食を提供していただいたことで、午前と午後をまたいでのイベントが可能となった。

アンケートや聞き取りでは、「雰囲気がよく子どもがすごく楽しめていた」などの意見をいただいた。また、どのようにイベントを知ったのか、どの企画がよかったのかについて知ることができたため、来年度へ取り組むべきことも明確になった。



イベント企画の様子



夏のキッズフェスの様子



秋のキッズフェスの様子

これから取り組むべきこと

①イベントの企画・実施

2023年度に実施した夏と秋のキッズフェスでは、人数配置のバランスや、連携した他団体との共有不足など、事前準備に関する反省を踏まえ、継続的に子どもたちが呼び込める環境づくりにつながるような企画・運営を、学生主体で行っていく。

②個人の探究活動

とうもんの里や周辺地域を様々な視点から興味を向け、探究活動を通して収集したことをチームの成長につなげられるように取り組む。事前準備が足りないという反省を踏まえ、フィールドワーク実施前に個人探究について各自で計画しておく。

御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 伊東錠太郎
(スポーツプロモーション) 3年 石川青空、鈴木壮悟、三谷柊次
2年 勝亦彩乃、小出康士郎、横山透真

指導教員：○講師 平嶋裕輔、教授 水谷洋一、講師 川崎和也
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

御前崎市総務部企画政策課
御前崎市観光協会
公益財団法人御前崎市振興公社

地域概要

静岡県内陸部最南端に位置する御前崎市は、人口30,288人（令和5年12月末）の自治体である。2004年4月1日、御前崎町と浜岡町が合併して御前崎市が誕生した。市内には「浜岡砂丘」や「御前崎灯台」のほか、「御前崎マリナパーク」「海鮮なぶら市場」「渚の交番」「あらさわふる里公園」など、さまざまな名所・施設がある。また年日照時間が国内で最も長いなど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサーフィンの世界大会も開催されている。

御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小・衰退などの諸問題に直面している。2045年には住民の5割近くが65歳以上の高齢者になると予想され、その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題も懸念される。それらの問題に対して、御前崎市では、①『活力』のある仕事・人材づくり、②『魅力』あふれる発信・交流づくり、③『希望』ある子育て・活躍の場づくり、④『安心』ある地域づくりの4つを基本戦略に掲げて、市民・行政・企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。

これまでの活動

2018年から私たちは、国と御前崎市との地方創生推進事業である「御前崎スポーツ振興プロジェクト」と連携して、御前崎市でフィールドワークを行ってきた。

(1)「U14御前崎NEXTA CUP2019」でのイベント開催 (2019年12月29日)

第2回U-14御前崎ネクスタカップで、全国からやって来る中学生たちにとって御前崎市での滞在がよい思い出となるように、キックターゲットの企画・運営および豚汁の提供を行った。

(2) おまえざきサイクリー (2021年3月20日)

御前崎市内のスポットを自転車で回りながらポイントやスタンプを集めて競う「おまえざきサイクリー」を市や観光協会の協力を得て開催した。計画、予算立て、スポットや景品の交渉などで実践的な学びを得ることができた。

(3) ストライダー・エンジョイ・カップ (2022年10月15日)

全国各地で開催される本イベントの運営の手伝いを行った。参加者の子供たちのパワーに圧倒されることなく、私たちも全力でイベントを盛り上げた。



地域創造学環

2023年度の活動について

2023年度からは、御前崎市役所に加えて、新たに「御前崎市振興公社」とも連携して、御前崎市の地域活性化に取り組んできた。御前崎市振興公社は、地域文化の活性化や市民の福祉及び健康に寄与する団体であることから、御前崎市振興公社の職員の方とともに、年齢や性別、障害の有無関係なく楽しめるスポーツイベントなどを通して、御前崎市民の方と直接関わることを大切にしながら活動を行ってきた。



〈2023年7月16日 マリンスポーツフェスタ〉

例年同様、マリンスポーツフェスタの運営補助を行った。カヌーやSUPの乗り降りの補助、準備・片付けを実施した。また、イベントの合間には「自分たち自身が御前崎市の魅力に触れる」という名目のもと、マリンスポーツの体験をした。普段はあまり触れることのないマリンスポーツを体験することが出来たととても貴重な時間だった。日照時間が長く、きれいな海もあるという御前崎市の屋外のスポーツを行う上でのポテンシャルの高さを再確認することができた。



〈2023年10月14日 御前崎インクルーシブサッカーフェスタ みんなで楽しむサッカー教室〉

このサッカーイベントは小学生を対象とし、御前崎市主催で、静岡大学地域創造学環、御前崎市振興公社、一般社団法人フットサル連盟の協力のもと開催された。目的は、性別、障害の有無関係なくサッカーを通して楽しく交流することであり、事前準備から当日の企画運営まで私たちが中心となって実施した。当日は、50名を超える小学生が参加してくれた。初対面同士での交流や障害者への気遣いなどサッカーを通じて良いコミュニケーションが取れているのが見受けられて、とても嬉しくやりがいを感じた。運営側の立場としては、想定外のことに仲間と協力して、柔軟に対応しきれた点は良かったが、準備不足、情報、役割分担が明確でなかった点などが反省に上がり、イベント運営の楽しさと同時に難しさも実感した。

〈2024年3月31日 ぶるる桜まつり〉

「御前崎市民プールすいすいパークぶるる」で開催された「ぶるる桜まつり」にて、私たちはニュースポーツのモルックの体験ブースを出店した。ぶるるマルシェのほか、法多山の厄除け団子の販売、eスポーツ体験等も行われた。小さな芝生の限られたスペースであったが、老若男女問わず、予想を超える多くの方が私たちのブースを訪れてくれた。ほとんどの方が初めて知るスポーツであったが、ルールを理解した上で本気で楽しんでくれた。私たち自身もeスポーツや御前崎市のグルメも堪能し、御前崎市民の皆さんの温かさや魅力を肌で実感でき、とても良い時間だった。



これから取り組むべきこと

これまで私たちは、外から人を呼ぶことに重点を置き活動を進めてきたが、今年度は御前崎市民を対象にしたイベントを開催することで、市民の方々と深い関わりを繋ぐことができた。アフターコロナにおいて、イベントを企画・運営することでより多くの市民の皆さんと関わることは今年度の大きな収穫である。引き続き、多角的な視点を持ち、魅力を発掘する作業から人を惹きつけることのできる発信の仕方等、こだわりを持ち活動をしていきたい。

松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 佐藤快成、2年 松岡大輝
(地域共生) 3年 赤井佑奈、富樫みさと、村宮汐莉
2年 古田采音
(アート&マネジメント) 2年 梅田夏希

指導教員：○准教授 牛場智、教授 阿部耕也

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

松崎町企画観光課
松崎町総務課
松崎町商工会
静岡県立松崎高等学校

地域概要

□『花とロマンの里』松崎町

松崎町は静岡大学から車で約3時間半、人口約5,500人の、西伊豆エリアに位置する町で、伝統的工法で保存されるなまこ壁や歴史的な建造物が立ち並びます。春になると、川沿いに咲き乱れる桜や田んぼを活用した花畑を見渡すことができ、温かな気持ちになります。

松崎町の魅力は景観だけではありません。松崎町は桜葉の生産量が日本で、全国シェアの約7割を占めます。そのため、町のお店には多くの桜葉を使用した食品が並んでいます。また松崎町では、季節を問わず豊富な海の幸を堪能することもできます。

さらに松崎町は、「the most beautiful villages in Japan（日本で最も美しい村連合）」の加盟地域であり、町の美しい景観を外に発信するほか、地域資源を再発見したり、町の景観を保護したりする活動が活発に行われています。「2030松崎プロジェクト」では、13のグループが、ツーリズムや農業等、各面の松崎町の課題からゴールを設定し、官民一体となった活動が行われています。

これまでの活動

□活動目標・テーマ

私たちのフィールドワークのテーマは『好きを咲かせる』です。松崎町の魅力や素材全体が土となり、松崎町に関わっている方々が種になります。そこへ私たち学生が水となり松崎町の魅力を伝えとともに、課題を発見し解決することで、種である松崎町に関わっている方々の、松崎町への「好き」の気持ちを咲かせることを目標に日々活動しています。

□これまでの活動



魅力発信

商店街の方々との交流を通してインタビューを行い、店主さんたちの素敵な人柄に焦点を当てた商店街パンフレット「てんしゅさんぽ」を作成しました。

中高生との交流

松崎中学校、松崎高校の生徒とワークショップを行い、松崎町の魅力や課題について話し合う機会を設けました。また、松崎高校の文化祭に参加するなど、松崎町の若者とのつながりも大事にしています。



イベントへの参加

棚田のライトアップイベントや棚田フェス、秋まつりなどに参加し、松崎町内外の方々との交流を深め、松崎の伝統を体験しました。



なまこ壁



俳句の町



桜葉餅



テーマイメージ



パンフレット表紙

2023年度の活動について

□高校生の居場所づくり

2023年度は、一時的ではなく持続可能な取り組みを行いたいと考え、松崎高校生との協働活動を目的としました。その上で高校生から、「松崎町には放課後に友人と集まって話したり勉強をしたりする居場所が無い」との声を受け、高校生を中心に地域住民が気軽に利用できる居場所として、「せんと」の整備を始めました。

高校生の居場所づくり 計画

2023年1月：高校生とのミーティング

何をしたいかを松崎高校生目線で考え、「高校生の居場所づくり」を行っていくことが決定しました。居場所探しとしてまち歩きを行い、空き店舗となっていた「せんと」を居場所に改修することとしました。その後、資金調達や居場所の雰囲気・備品に関する話し合いを行いました。



2023年6月・9月：せんととの整備、備品調達

6月には、高校生と共にせんととの清掃を行いました。また9月には、大学生が不要な参考書やカードゲームを持ち寄りました。



清掃の様子



不要品回収のポスター

高校生の居場所づくり 実行

2023年10月：不用品回収

高校生と共にリアカーをひきながら、実際に町内の住宅を訪問し、棚、机、本等の不用品の回収をさせて頂きました。居場所の整備が進んだだけではなく、住民の方との交流を通して、活動を知って頂くきっかけにもなったと感じています。



2024年1月：松崎高校部活動とのコラボ依頼

松崎高校美術部と、総合科学部・家庭班に、居場所づくりを協働で行って頂くための依頼を行いました。今後さらに具体的な話し合いを行う予定となりました。



譲っていただいた食器類



備品整備後のせんとの様子

これから取り組むべきこと

□“居場所づくり”の完成へ

2023年度は、“居場所”の実現を目標として、松崎高校生と協力しながらせんととの整備を行いました。現在は、居場所自体を整備し終え、今後どのような体制で管理・経営をするかという点を考えている段階です。

今年度をもって地域創造学環としての活動が終了することを考慮すると、今年度は、地域にとっての“せんととの存在意義”を高めていく1年としたいと考えています。せんとが、地域に馴染んだ1つの交流の場所となることを目標としています。

そのため、まずは住民の方にせんとをより知って頂くためのイベントを実施したいと考えています。

今後は以下のようなスケジュールでの活動を予定しています。

〈2024年の主なスケジュール予定〉

4月 OPENイベントについて話し合い
5月 OPENイベントについて話し合い
6月 せんととのOPENイベント実施
7月 居場所の状況確認、反省と改善
8月 イベントの実施について話し合い
9月 イベントの実施について話し合い
10月 イベントの実施
11月 今後の管理体制の調整
12月 今後の管理体制の調整



せんと前にて

最後になりますが、私たち学生の活動を快く引き受けてくださっている松崎町の方々のご厚意に心から感謝申し上げます。短い間ではありますが、今後も松崎町の地域活性化を目指し、微力ながら協力させていただきたいと思っておりますので、是非ともよろしくお願いいたします。

松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの
(地域経営) 3年 桂木健伸、木下皓貴
(地域環境・防災) 2年 前川愛依、吉田さくら
(アート&マネジメント) 2年 廣沢希実
(スポーツプロモーション) 3年 山下笑花
指導教員：○准教授 原田賢治、准教授 山本隆太
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
松崎町企画観光課
松崎町総務課
松崎町立松崎小学校
松崎町立松崎中学校
静岡県立松崎高等学校
松崎町西区、中区、北区のみなさま
企業組合松崎桑葉ファーム

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、観光地として有名な港町である。

海底火山により形成された不思議な地形・海などの自然風景や、国指定重要文化財の岩科学校などにみられるなまこ壁など、見所の多い地域であり、駿河湾に面した豊かな漁場からの海の幸や国内シェア7割を誇る桜葉の塩漬けなど、食の魅力にもあふれている。

しかし、海沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には約7分で最大15mという大きな津波被害が想定されている。町内は細い道が多く、高齢化も著しいことからソフト・ハード面ともに防災施策への取り組みが急務である。



◀右：雲見の足湯
左：岩科学校



▲なまこ壁

これまでの活動

防災訓練の実施

松崎町西区の津波避難タワーへ避難する地区において、地震発生時に通れなくなる恐れのある狭い道を封鎖して避難訓練を行い、津波避難タワーの設備紹介を行った。

災害時を意識した行動の促進と、防災施設の把握により災害時の住民の主体的な対応力を向上させる目的で行ったが、実際には防災施設や用具の使い方を把握していない住民が多かったため、緊急時に誰でも使えるような普及活動を行う必要があると分かった。



観光防災マップの作成

2020年度に松崎町西区・中区・北区の住民の方々から収集したクチコミを元に防災マップを作成した。具体的には、避難時における危険箇所や要注意箇所の情報を掲載した。

また、2021年度には観光情報と防災情報が一体となったマップを作成し、オンライン上での観光情報と防災情報の閲覧を可能にした。アイコンや簡略化した道で観光客が観光地である松崎町をより分かりやすくするとともに、施設の防災基本情報に加えて施設への避難の仕方や道順を動画・画像にして避難の手助けとなるものになった。

Webスタンプラリーの実施

松崎町に住んでいる人々に町の魅力を再発見してもらう目的の下、町内の小学生を対象にした「まっざき魅力発見！webスタンプラリー」を実施した。実施期間は1週間であり、スタンプラリーへの参加者は計7人であった。

スタンプラリーの対象地決定のために、町内の主な観光地の訪問や町内の小学生に対する観光地の認知度アンケートを行った。



▲防災訓練の様子



▲スタンプラリーのポスター

2023年度の活動について

商品パッケージのデザイン案作成

松崎町で有名な桑の葉に注目をし、企業組合松崎桑葉ファームの方と話し合いをする機会をいただいた。その結果、「伊豆の桑葉パウダーうどん」「伊豆の桑葉パウダーそば」(以下、桑葉うどん、桑葉そばと表記する)の商品パッケージのデザイン案作成に携わることになった。桑葉うどん、桑葉そばの旧パッケージデザインの課題として「店頭に並んだ際に商品が目立たない」ことが挙げられた。この課題を解決するために、桑の葉のイメージを前面に出し、他商品と差別化したデザイン案の作成を行った。

調査活動

①2030松崎プロジェクト中間発表会への参加

2030松崎プロジェクトの中間発表会に参加した。

これまでのフィールドワークでの活動を報告するとともに、プロジェクトの詳細や、松崎町内で活動している「花の会」や「ポートクラブ」の活動、松崎高校の探究活動について知る機会になった。

②話し合い@松崎町役場

松崎町役場で総務課消防・防災係の山本さんと本多さんに松崎町の防災に関する課題についてお話を伺った。

- ①安全な場所が少ないこと
- ②町民に高齢者が占める割合が大きいくこと（高齢者の対応）
- ③災害時に孤立集落が発生することが松崎町の防災面における主な課題である。こうした課題に対しどのような取り組みを行うことが可能か話し合いを行った。また、松崎町で活躍しているふじのくに防災士の方と連携を取りながら活動を進めていくという案をいただいた。

③松崎町の避難場所の視察

松崎町の津波避難場所の現状を把握するために、実際に「牛原山遊歩道」「伊那下神社神殿裏山」「浄泉寺」「相生堂跡地」「絹の道」の5地点を視察した。避難場所や、避難場所へ辿り着くまでの経路に、避難を滞らせる危険な要素を抱えている地点が多く存在した。



▲絹の道 倒木の様子



▲相生堂跡地 道を塞ぐ植物



▲相生堂跡地 柵が設置されていない崖

これから取り組むべきこと

今後取り組むべき具体的な活動

①パッケージデザインの作成と最終提案

現在、桑葉ファームの方との話し合いを踏まえ、商品パッケージのデザイン案の作成を進めている。今後も様々な意見や要望を頂きながら、商品イメージにあったデザイン案の作成と提案を行う。最終的には、新パッケージが店頭に並ぶ予定である。

②活動案の具体化と実施

2023年度に行った調査活動で得た学びを踏まえ、今後の活動案を具体的に考えることが求められる。現段階で、2024年度は防災面の活動を中心に行うことを計画している。考えた活動を松崎町役場やふじのくに防災士の方へ共有をし、協力していただく中で活動を実施することを目指す。



▲パッケージデザイン完成イメージ



▲2030松崎プロジェクト中間発表会の様子

東伊豆町

新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域経営) 3年 池田康太、高野美羽音、山田海斗、2年 佐藤正樹

(地域共生) 2年 菊地美瑚

(アート&マネジメント) 2年 入井優希奈、竹田朱里

(スポーツプロモーション) 3年 北嶋茉智、2年 森千紘

指導教員：○教授 阿部耕也、准教授 牛場智

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者

合同会社so-an

地域概要

東伊豆町は、伊豆半島東部に位置する漁村である。私たちが主に活動の拠点としている稲取地区は、港町の美しい景色や、金目鯛などの美味しい食べ物が特徴的な地域である。朝市では、地域の特産品を使用した商品が売り出されており観光客や地域住民で賑わう活気ある場所となっている。また、温泉地であるため観光業が盛んな地域である。

周囲は海と山に囲まれており、細野高原では春には山菜をとることができ、秋になるとスギが一面に広がり美しい景色が見られる。細野高原は草原として維持をするために、毎年山焼きも行われている。

稲取は雛の吊るし飾り発祥の地である。毎年1月20日から3月31日にかけて「雛の吊るし飾り祭り」が開催されている。それに伴い、素戔鳴（すさのお）神社では、神社の118段の階段に雛人形と雛の吊るし飾りが飾られ、地域の伝統を感じられる、美しい景色を見ることができる。地域のイベントとしてはキンメモラソンがあり、毎年2000人程の参加者で賑わいを見せている。

これまでの活動

キンメナーレ（2021）

稲取を拠点に活動するプレイヤーさんと東伊豆で暮らす人々をつなげる街歩きイベント。

東伊豆学生サミット（各年）

東伊豆で活動する他大学や稲取高校の生徒と交流し東伊豆での活動や今後の展望について意見交換を実施。

ダイロク通信（各月）

フィールドワークでの活動を地域の情報紙であるダイロク通信にて発信。

NEWHAKU（2022）

東伊豆案内看板の作成。地元の子供達、高校生らと交流しながら、先代が作成したライブペイントのリニューアルを実施。

何でも屋（2023）

町役場、地元根付く和菓子屋、農家などのお手伝い。地元の方との交流の機会になった。

成立学園高校合同フィールドワーク（2023）

東京の高校生に地方国公立への進学を考えてもらおうと共に、稲取の地の魅力を高校生の視点から新たに発見することができた。

朝市前看板作成（2023）

朝市の会場に設置してある看板をデザイン、作成した。

シャッターアートの作成（2023）

地域で商いを行う飲食店のシャッターにデザインを施した。

東伊豆魅力発見大学校（2024）

旧稲取幼稚園を活用し、地域の方々に東伊豆の魅力を再発見していただくイベントを開催。同時に成立学園高校合同フィールドワークを3日間かけて行った。



朝市前の看板



シャッターアート作成



成立学園とのフィールドワーク

2023年度の活動について

東伊豆魅力発見大学校

【開催経緯】

フィールドワークの活動を通して、東伊豆で活動する地域の事業者や地域おこし協力隊、学生の方々と交流をしてきた。その中で、あらゆる観点から東伊豆の魅力に触れることができた。

その一方で若者をはじめとした地域の方々にはその魅力が伝わっているのかという疑問も生じた。そこで、改めて地域の魅力を発見してほしいとの思いからこのイベントの開催に到った。

【企画内容】

旧稲取幼稚園を舞台に、「東伊豆を心の底から好きになること」をコンセプトとして開催した。地域の方々にご協力いただき、東伊豆の特色を反映させた多くの企画を行った。各教室を教科ごとに割り振りそれぞれでイベントを行うことで、幼稚園という建物の特徴を生かした再利用の例を提案している。

東伊豆ご当地購買部「飲食スペース」

地域の方々による出店が並ぶ

家庭科「いちご大福づくり体験」

東伊豆のお菓子屋さん、農家さんの協力のもと開催

生物「動物ふれあい体験」

動物飼育養成学校によるふれあい体験

美術「いなとりパレット」

稲取の色で映える、大きな木をみんなでデザインする

体育「東伊豆ニュースポーツ体験」

ニュースポーツをみんなで体験できる

図工「雛のつるし飾り制作体験」

東伊豆の伝統品の制作体験

社会「東伊豆社会科見学」

東伊豆で活動する学生、地域おこし協力隊さんとのトークセッション

科学社会「伊豆半島ジオパークについて学ぼう」

大学教授、ジオガイドの方々による授業を開講

進路探求「オンラインオープンキャンパス」

複数の高校のトークセッションの他、大学のオンラインオープンキャンパスの開催

【成立学園との合同フィールドワーク】

イベントの2日前から東京都にある成立学園高校の学生が探求活動の一貫で東伊豆を訪れていた。静岡大学東伊豆フィールドワークもプロジェクトに関わらせて頂くと同時に、イベント当日には高校生にも協力して頂きながらイベントを運営した。

これから取り組むべきこと

イベントの開催を通して自分達自身も東伊豆の魅力を発見することができた。また、イベントの広報活動や地域内でのデザインの作成を通して私達静大生が東伊豆で活動していることの認知度の向上が図れたとも感じる。

次期で地域創造学環としてのフィールドワークは幕を閉じるが、如何に地域の人々に自分の地域のことについて知ってもらうか、自分の地域のことを好きになってもらえるのかについて考えたい。

また、学生サミットを通して東伊豆で活動する他大学の学生や地域の高校生との交流を持つことができた。このつながりを生かした取り組みを実施し、自分達だけではできないことを実現させていきたい。

地域創造学環



家庭科 いちご大福づくりの様子



生物 亀と触れ合う様子



美術 色を塗っている様子

伊豆半島全域（ジオパーク）

地域づくりとジオパーク

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの
(地域経営) 3年 綿引駿、2年 沼井俊人
(地域環境・防災) 2年 福本奈穂
(スポーツプロモーション) 3年 内山道都、長沼善虎、2年 森万穂里
指導教員：○准教授 山本隆太、教授 小山真人、講師 内山智尋
※○は兼任教員

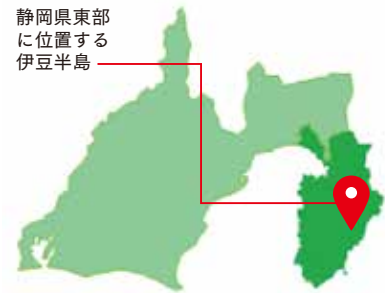
フィールドワーク実施協力者
一般社団法人美しい伊豆創造センター ジオパーク推進部
伊豆半島ジオガイド協会
静岡県賀茂地域局
ふらっと月ヶ瀬
有限会社オートクラフト・IZU
スルガ銀行株式会社
株式会社伊豆バス

地域概要

伊豆半島は、静岡県東部に位置する火山によって形作られた半島である。漁業が盛んな伊東や西伊豆、温泉観光地である修善寺や熱海などがあり、2018年4月には伊豆半島内の15市町による取り組みがユネスコ世界ジオパークに認定された。ジオパークとは、地形や地質またそこに根づく文化や伝統を保全・活用していく場であり、日本国内では現在、ユネスコ世界ジオパークに10か所が認定されている。

伊豆半島ジオパークは、現在もプレートの動きによって地殻変動を続けており、火山や地震による様々な地形や資源がみられる。

私たちは、2015年の国連サミットで採択されたSDGsの「誰一人も残さない」という理念に基づいて、伊豆半島ジオパークを活用した自然の保護保全をベースとしながら、地域社会の産業、福祉、教育へと連続する一連の活動を行っている。



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
私たちフィールドワークメンバーは持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

これまでの活動

1年目 (2017年度)	☆ジオパークについての学習 ☆ジオガイドとのワークショップ ☆パンフレット作り	2年目 (2018年度)	☆SDGs 肉まんの開発 ☆ジオパン開発、販売支援 ☆郷土料理についての学習
3年目 (2019年度)	☆大学生を対象としたツアーの開発 ☆VR動画を利用した学習教材の開発 ☆食育教材の作成	4年目 (2020年度)	☆伊豆：サイクリングルートの開発 ☆西伊豆：オンラインジオツアーの開発 ☆1年生へのガイドツアーの実施
5年目 (2021年度)	☆松崎：ジオ・クア・ウォーキングの実施 ☆伊豆半島ジオパーク推進協議会と 静岡県温泉協会イベント支援 ☆三島：高校生まちあるきの実施	6年目 (2022年度)	☆伊東：漁業ワークショップの開催 ☆修善寺：防災サイトの使い方講座 ☆中伊豆×焼津：静岡おくみゆプロジェクトの実施 ☆伊豆：狩野城の御城印デザイン作成

これから取り組むこと

今後は、独自の専門分野に分かれて、活動を行っていく予定である。
地域経営分野を専門とする沼井は、熱海市の商店街の経営に関する調査やスルガ銀行と協力し、e-bikeを活用した地域巡りのPR動画を作成するなど、経営の知識を活かした活動を行う予定である。

地域防災分野を専門とする福本は、防災意識の向上を図るため、6月に月ヶ瀬地区での防災イベント開催を予定している。それに伴う準備として、4月のフィールドワークでは複合施設の「ふらっと月ヶ瀬」でまちづくり協議会や伊豆市役所、地域住民の方々と合同で防災イベント実施に向けた会議を行った。

スポーツ分野を専門とする森は、伊豆×自転車という認識の拡大や高齢者の介護予防に向け、「株式会社オートクラフトIZU」に協力を依頼し、今年度秋に「おもしろ自転車」を活用した合同イベントを企画している。

また、実際に「防災体験」を行うブースや能登半島の地震による被害を受けた土地の食料を販売する「マルシェ」を行ったり（地域防災）、「おもしろ自転車」を地域住民の交流材料として活用したり（スポーツ）と、一つのイベントの中でそれぞれの分野を掛け合わせたイベントなども視野に入れている。分野を掛け合わせることで、防災に興味を持ちイベントに参加していただいた方はスポーツへ、スポーツに興味を持ちイベントに参加していただいた方は防災へと新たな知識を深めてもらえることを期待している。

2023年度の活動について

スルガ銀行主催 e-bike ツアーガイド

☆スルガ銀行と協力し、伊豆半島のジオスポットを巡るe-bikeツアーを企画・試走・運営!!
各ジオスポットごとに学生がジオガイドを担当!!

活動内容

コース

KANOBASE⇒①浄蓮の滝⇒②鉢窪山⇒③荒原の棚田⇒④国士峠⇒
⑤筏場のわさび田⇒⑥下白岩⇒⑦旭滝⇒KANOBASE

ジオガイドをするにあたり意識したのは、話し方や声の大きさだけでなく、説明の中にクイズを取り入れることや、ストーリー性を持った説明などを行った。これにより、参加者に伊豆の魅力を感じていただくとともに、交流が生まれ地域づくりに繋げることが出来たと考えられる。また、当日は参加者と積極的に交流することを意識した。

参加者の方々からは、「五感を使って楽しむことが出来た。」「学生がガイドを行うことが新鮮だった。」という意見をいただいた。



スルガ銀行主催 e-bike ツアーの様子



【おもしろ自転車×ふらっと月ヶ瀬（綿引・内山）】

☆2023年10月に伊豆市の月ヶ瀬地区にある複合施設ふらっと月ヶ瀬にて、
おもしろ自転車を活用した交流イベントを開催!!（※当初6月の予定であったが、雨天のため延期）

概要

◎オートクラフトIZU：様々なおもしろ自転車を開発・製造・販売・レンタルを行っている企業。
◎ふらっと月ヶ瀬：高齢者施設、こども園、障がい者施設、カフェで構成されている複合施設。また、地域住民の方々が交流する貴重な場。

私たちは、イベントで「ふらっと月ヶ瀬が地域に愛される施設となること」を目標とし、その第一歩として「企業の経営」と「スポーツによる地域活性化」に焦点をあてて活動を行った。

活動内容

様々な立場の方にも配慮し、より多く方が参加できるような工夫としてイベント内容である、「やぶさめリレー」(三人一組で自転車に乗り、協力して水鉄砲を用いて的を射貫き次の人にリレーする)を行う前に、おもしろ自転車で自由に楽しむ時間を作ることでアイスブレイクを図った。この工夫によって、様々な人がおもしろ自転車をを用いて交流を図ることができたと考えられる。

また、おもしろ自転車を利用した運動における心理的効果を検証するため、アンケート調査を行った。アンケート結果から、運動における疲労と快適な感情には関係性があるという可能性が考えられた。そして、子供は「またやりたい。」などという積極的な意見を持っていた。



【中部EPO SDGs学生サミット（綿引・内山）】

☆中部地方の他大学とのSDGsに関する活動報告会・意見交換会への参加!!

SDGsに関する活動を行っている、他大学の学生とお互いの活動報告会を行った。私たちの活動は無意識のうちにSDGs達成に貢献していることを改めて再確認した。



スルガ銀行主催 e-bike ツアーガイドのSDGs関係図



おもしろ自転車×ふらっと月ヶ瀬のSDGs関係図

多世代の居場所づくり

多世代の居場所づくりと防災教育の実践

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの

(地域共生) 3年 瀧川理越、吉田美空、2年 川原綾花、菊地凜太郎

(地域環境・防災) 3年 木村絢、2年 占部暖花、沼崎沙耶

指導教員：○教授 山本崇記、教授 吉川真理

准教授 須藤智、講師 立花由美子

※○は兼任教員

フィールドワーク実施協力者

龍津寺

静岡市立清水小島小学校

社会福祉法人静岡市社会福祉協議会

地域概要

多世代の居場所づくりフィールドは、静岡市清水区の小島地区を拠点として活動をしている。小島地区は、興津川沿いの河岸段丘上にある山に囲まれた自然豊かな地域である。一方で、少子化・高齢化が顕著であるという地域課題がある。そこで私たちは、子どもたちの居場所づくりに取り組んでいる龍津寺を拠点として、小島で活動している様々な地域コミュニティに関わり、子どもから高齢者まで、多世代が交流を深めることが出来る「居場所づくり」を目指し活動をしている。

これまでの活動

・龍津寺土曜子ども寺子屋

小島地区の龍津寺で土曜午前に開催されている。子どもたちとボランティアが集まり行っている活動である。龍津寺子ども寺子屋は、子どもたちの主体性を尊重し、のびのびと過ごすことができる居場所である。学生や地域住民の方々が先生（見守り）として参加し、論語の音読を行ったり、勉強や談笑したりして子どもたちと交流を深めている。

・多世代交流ニュースポーツ大会

体を動かしながら子どもから高齢者まで誰でも参加、交流できるイベントとして企画した。子ども連れのご家族や高齢者の方など幅広い世代の方々が参加して下さった。

感染症が流行している中、対策を行いながら住民の方々の健康的な習慣づくりと多世代のつながりづくりを目的とし開催することができた。

・S型デイサービス

S型デイサービスは、社会福祉協議会の推進事業として行われ、高齢者の生きがいづくり、社会的孤立の防止を目的として各地にできている。小島町のS型デイサービスでは、「おしゃべりの場、集まりの場」の提供を重視しており、体操やゲーム、おしゃべりをしている。実際に参加させていただいた際には、参加者とボランティアの方との境なく、共に楽しむ雰囲気が印象的であった。高齢化が進んだことで、参加者とボランティアの方の年齢の差があまりなくなっている。また、ボランティアだった方が参加者へと変更するケースも増えている。新型コロナウイルスによる制限が緩和され、お昼ご飯と一緒に食べることができるようになっていた。参加者の減少や、ボランティアの方の高齢化など、活動を続けていくために若い世代との交流の場をつくる必要があると感じている。



S型デイサービスペタボードの様子（写真1）

2023年度の活動について

○龍津寺での継続的な活動

・小島ほうもう舎（2023年11月23日）

4年ぶりに開催されたほうもう舎。子どもたちが龍津寺に宿泊し学校に通う2泊3日で行われるイベントの1日目に参加した。全員で夕食をとったり、レクリエーションを行ったりして交流を深めた。レクリエーションでは子どもたちは自分なりの考えをグループのメンバーに共有し理解を深めていた。

全員で行った花火を楽しんだ後は座禅をして気持ちを切り替え1日の活動を終えた。

ほうもう舎の参加では、子どもたちがのびのびと活動できる居場所の重要性を認識したと同時にそのような居場所づくりには地域住民の方々や子どもたちのご両親など様々なサポートも必要不可欠であると考えた。



ほうもう舎での食事の様子（写真2）

・SDGsイベント（2024年1月13日）

近年社会的に取り上げられているSDGsを子どもたちに楽しく知ってもらうために企画した。イベントでは座学とSDGsについて学べるすごろくを行った。

座学では子どもたちにSDGsを身近に感じてもらえるよう、小島地区と関連した目標を取りあげて説明を行った。他人事ではなく自分に関係するトピックであると認識してもらえるように心がけた。すごろくでは子どもたちが自分なりに考え主体的にゲームに参加していた。しかし、すごろくで使用した質問文の難易度など課題が見つかった。多世代が同時に楽しめる基準を熟考するべきという今後の展望が見えた。このイベントでは、SDGsを子どもたちに知ってもらう機会を設け、主体的に子どもたちに参加してもらうことができた。



SDGsイベントでの座学の様子（写真3）

○芝植え

・52ゆめひろば

国道52号線沿いの広場にて芝植えを行い、地域の人が自由に使える「52ゆめひろば」が誕生した。芝植えから芝開きまでお手伝いをさせていただいた。参加者は寺子屋よりも下の世代であり、常時活動では関わることのない世代との交流となった。家族連れの参加者も多く、また三世代での参加も見られた。継続的な活動を行う上では、幅広い世代の参加が必要となる。だれでも自由に使うことのできるゆめひろばの誕生は、世代間の交流をつくるきっかけの場所となるのではないかと考える。



52ゆめひろばでの活動（写真4）

これから取り組むべきこと

関わりのない世代との交流

これまでの活動を通して、寺子屋では子ども、S型デイサービスでは高齢者との交流ができた。2つの活動をつなぐ企画、世代間の交流をさかんに行うことができる活動を行いたい。

継続的な交流・参加

これまで関わってきた方々との継続的な活動を行い、信頼関係の強化を図る。

新たなイベントの企画・提案

52ゆめひろばの活用など、これまでの反省を踏まえた上で、新たな企画の提案を行う。

学内地域連携拠点

静大発 地域と大学の連携を広めよう！

メンバー ※学生の学年及び教員の職位は2023年度のもの
(地域共生) 3年 古瀬愛優美
(アート&マネジメント) 3年 馬場凜桜
(スポーツプロモーション) 3年 金子涼太郎、近藤優介
指導教員：○講師 川崎和也、教授 山本崇記
※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者
静岡大学学務部地域連携推進課

地域概要

学内地域連携拠点フィールドは2018年より活動を開始したフィールドである。

学内地域連携拠点フィールドの活動のテーマは、「つなぐ」である。具体的には、①静岡大学地域創造学環（以下、学環と記載）と地域を「つなぐ」、②学環のフィールドおよび学生同士を「つなぐ」ことである。こうした取り組みを通じて、魅力的な地域社会の創造に取り組むことのできる人材の育成に貢献することを目指している。

これまでの活動

学内地域連携拠点フィールドは、2019年度までは静岡大学教育連携室（現在、地域連携推進課）と連携し、『静大発 “ふじのくに” 創生プラン』（文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」）の促進を目的として活動を行ってきた。2020年度以降は、私たち自身が「地域と大学の接点」となることを意識して、以下のような活動に取り組んできた。

●フィールドワークの取材、および活動紹介記事の作成

学環のフィールドワーク活動の情報発信に取り組むにあたって、実際にフィールドワークに同行し、学生たちの活動の様子を取材した。これまで「とうもんの里フィールド」（2020年）、「多世代の居場所づくりフィールド」（2021年）の活動紹介記事を作成した。2022年には、清水港周辺地域フィールドの学生たちが主体となって企画運営を行った「スマイルロゲイニング」の事前準備および当日のイベントの様子を取材した。本番のコースと一緒に歩いてめぐり、明らかになった課題点に対する解決策についての話し合いの様子を取材したり、学生やイベント参加者、地元の方々とお話をうかがったりした。作成した記事は学環のHPに掲載している。

●「フィールドワーク交流会」の企画

かねてより、学環の一部の学生たちからフィールドワーク活動について他のフィールドの学生たちと情報共有し、意見交換をする機会が欲しいとの声があった。それを踏まえて、学環の学生たちが集い、特定のテーマに沿って意見交換を行う「フィールドワーク交流会」を企画した。交流会を開催するにあたって「フィールドワーク活動における情報発信」をテーマに決めて、各フィールドに情報発信に関する事前アンケート調査を実施するなど、その準備に取り組んだ。2022年10月20日(木)「フィールドワーク交流会」を実施し、普段は関わることのない他のフィールドの学生たちが直接話し合い、考え方を共有することができた。ここで交わされた意見は、それぞれのフィールドの活動でも活かせるものばかりで、今後のフィールドワーク活動の更なる展開を期待できる、とても内容の充実した交流会であった。また交流会の準備への取り組みを通して、自分たちのアイデアを形にし、それを実現してゆくためのノウハウについて実践的に学ぶことができた。



学内地域連携拠点フィールドの活動の様子



清水港周辺フィールドの学生への取材の様子



交流会の様子

2023年度の活動について

●伊豆市訪問・取材、および活動紹介記事の作成

2023年9月3日(日)、4日(月)の2日間にわたり伊豆市を訪れた。今回の訪問は、伊豆半島の自然や歴史に接し、それらに関わる方々との交流を通じて、伊豆の魅力や課題への理解を深め、大学と地域の連携のあり方について考えることを目的としたもので、静岡大学東部サテライトオフィスの内山智尋先生をはじめ多くの方々のご協力のもとで可能となった。

伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」や「浄蓮の滝」、「修善寺温泉」などの伊豆の観光スポットを訪れ、伊豆の魅力的な自然や歴史について学ぶとともに、みんなの居場所「ののはな」、「オートクラフト伊豆」、「ふらっと月ヶ瀬プラム」を訪れ、お話をうかがわせていただくなど、地域の方々との交流を通して、若者の力が必要とされている現状を改めて理解することができた。2日目の最後には、伊豆市の地元ラジオ「FMIS」に出演させていただき、2日間の伊豆市訪問を通じて、私たちが学んだこと、考えたこと、感じたことなどについて話をした。

この体験を通じて、学生たちが地域と継続的に関わり、地域の魅力を発信したり、地域の振興に向けて活動を行ったりすることで、地域と外部の人々を「つなぐ」役割を担うことができると考えた。なお、私たちの伊豆市訪問の様子については、「フィールドワーク紀行in伊豆半島」にまとめ、学環HPにて公開している。



しろばんばの里「上の家」



伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」



ラジオ出演の様子

●スマイルロゲイニング運営補助

2023年12月10日(日)、清水港周辺地域フィールドの学生たちが企画運営する「スマイルロゲイニング」が開催されるにあたって、昨年度に引き続き、イベント運営の補助として参加した。事前準備にも参加し、当日歩くルートを確認に把握できたことで、本番では参加者の方々と楽しみながら一緒にチェックポイントをまわり、円滑な運営のサポートを行うことができた。また、イベントに参加された方々が地域の方と交流するきっかけを得たり、地域の魅力に気付いたりする様子を間近に見ることができ、学内地域連携拠点フィールドの活動テーマでもある、地域と地域を「つなぐ」手伝いができた活動であった。



「スマイルロゲイニング」のお手伝いの様子

これまでの活動を振り返って

学内地域連携拠点フィールドでは、主に各フィールドの取材と交流会の開催を行ってきた。各フィールドの取材を通して、それぞれのフィールドで取り組んでいる魅力的な活動の様子を見た。そして、各フィールドをつなげるために交流会を開催することで、他フィールドの学生と共によりよいフィールドワークを実施する方法を考えた。最後には、実際に伊豆に足を運び住民の方々との交流し、地域課題の解決策について話し合うことで、地域とのつながりを築くことができた。

これまで「つなぐ」というテーマに沿ってフィールド間や学生と地域の懸け橋となるような活動を行ってきたが、最後に自らが地域とのつながりを築くことで、学生が地域とつながることの大切さや、地域での活動を通して学ぶことの多さを実感することができた。

2023年度に2年半の活動を終えた学生たちの 声を紹介します！

～地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと～

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は、1年次後期から2年半、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をします。2023年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声を集めました。

清水港フィールドワークで活動を行う中で、イベントを企画し、運営する難しさを学んだ。清水港周辺地域を対象としたイベントということで、地域住民の方々に企画内容の説明と協力をお願いした時に、こちらはイベントの内容や協力の仕方を説明したと認識していたが、お店の方々には当日のイベントまでどのようなイベントであるかがあまり伝わっていなかった。この態度は協力をお願いする立場として、配慮が足りていないと反省をした。また企画段階において、担当ごとの役割も、改善の余地があり課題が残ったと言える。私は企画についてのマニュアル担当であったが、完成までに時間がかかり、企画説明の際に持って行けず、お店の人に配ることができなかった。納期を意識し、守ることは社会人としての基礎能力であり、それができないと物事が円滑に進まないということを身をもって学んだ。また、協力していただいた方々へ誠意を持って関わることの大切さも学んだ。

清水港周辺地域フィールド 新宮 周馬



2年半のフィールドワークを通して、地域の方、そして地域外の方にも庵原の魅力にふれてもらうことがつながりを生み、地域全体の活性化に結びつくことができたと学びました。庵原フィールドの活動の1つである「清水いはらフェス」では、住民の方だけでなく、県外からも多くの方が参加されます。我々はノルディックウォーキングのブースを出店し、庵原の良さを伝えるコースづくりを心がけることや歩き方の指導、一緒にコースを歩くなど、実際に参加者と接することで、庵原に対する思いや意見を聞くことができました。その地域の住民だけでなく、他の地域の方の意見を取り入れることで、改めて本来のよさに気づかされたのが印象的です。フィールドワークを通して、得た経験や感じたことを今後の庵原の発展にもたらすとともに、私自身も地域の方と積極的に関わり、視野を広げ様々な観点からものごとを見ることができるようになりたいです。

庵原フィールド 法月 優衣



私たちのフィールドでは、「おまちバル」を通じて地域のイベント運用について学んだ。おまちバルとは、静岡駅周辺で行うチケット購入制の飲食イベントである。実行委員会の方々と連携しながら、「飲食店が多い」という地域資源を活用するために活動した。私たちの主な活動内容は、学割プロジェクトやコンセプトバルの企画・実行、SNS運用などである。若者の参加率が低いことを課題とし、改善するために私たちが「若者目線」から多方面にアプローチできないか考えながら活動した。地域の人々と直接交流できた飲食店へのインタビューや店舗調査を通じ、地域イベントが及ぼす飲食店への好影響を実感した。この3年間、コロナ禍の影響や人数減少に伴う活動規模の縮小により、思うように活動できなかったところもあった。そのため、後輩たちには少人数でもできることを模索し、さらなるイベントの活性化に向けて貢献してほしいと思う。

おまちフィールド 日名子 ゆり



約2年半のフィールドワークの活動で地域との関わりや実践を通じて私は物事を逆から考える考え方を学んだ。この2年半私は、焼津浜通り地区を中心にそれぞれワーケーションと漁業というテーマで活動してきたが、どれも経済効果をどのようにして生み出していかんという狙いがあった。まずはこの狙い、目的をつかむところから始まり、そのためにどのような部分にアプローチしていくべきなのかという考え方が自分の中で洗練されていったと感じる。これまで、自分の中になかった考え方を発見すると同時にそれを他者との関わりによってアウトプットしてより深めてくれたのがこの授業であると考え。これらの経験を踏まえて、物事に対して様々な角度から考えることを実践しより社会に溶け込んでいけるようにこれからも頑張りたい。

焼津市浜通りフィールド 長瀬 裕哉



商店街のお祭りである長政祭りと輪くぐりさんでは主に子供向けのイベントの企画を2年半の間にそれぞれ2回やらせて頂きましたが、昨年度の企画のルールや安全面などへの反省や課題を次年度の企画、運営の際に実際に生かしたことは貴重な経験になり、また成長を実感する機会にもなりました。

また、長期休みが間に入るなどメンバーが実際に集まれる機会が少ない中でお祭りの企画を進めるに当たり、Zoomの会議やLINEのグループとノートを情報共有ツールとして使い、連携を図ったことやお祭り当日も役割分担しながらも連携をとりつつ、臨機応変に対応することで企画を進められたことから、連携と情報共有がチームで動く上で重要であることを学びました。社会に出てからも多くの人と関わって仕事をする機会があると思いますので、この学びを生かしていきたいと思います。

浅間通り商店街フィールド 鈴木 唯心

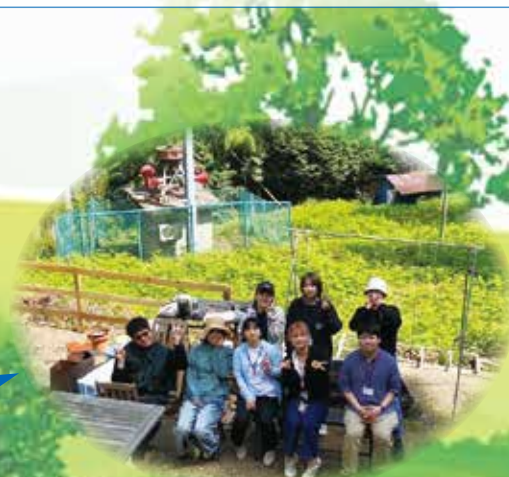


2年半のフィールドワークを通して、ありがたいことにわたしたちのやりたいことを実践する機会を与えていただきました。未熟な私達が企画するプロジェクトには、失敗がつきものでした。しかし、失敗によって多くの学びを得ることができました。

会議を重ねて、不備のない企画を作ったつもりでいても、必ず実際の現場で課題や障害に直面しました。その度に反省と改善を繰り返し、人に来てもらうまでのプロセスの解像度を向上させることができました。こうした地道な試行錯誤は、問題解決能力を向上させるだけでなく、実践的な場当たりのスキルや技術も磨かれました。

こうした経験は、フィールドワークでしか得ることのできない大きな自信につながりました。2年半、本当にありがとうございました。

浜松文芸館フィールド 田中 奏大



佐久間フィールドでは、「交流の環づくり」をテーマに様々な人と出会い、協力することで地域の魅力をさらに盛り上げ、発信する活動を行ってきました。主に地域おこし協力隊の方々の活動に参加したり、学生主体のイベントを企画し開催したりするなどの活動を行いました。特に学生が主体となって実行したワークショップイベントでは、企画の考案から準備や告知などを全て行い、開催に至るまでのイベント運営の手順を学ぶことができました。協力してくださった方の活動から課題を探り、メンバーそれぞれの所属コースの特徴を活かした企画を考えることで、課題を捉えた企画力を養うことができました。

また、イベントでは、それぞれが協力して運営に取り組み、2年半前に比べて柔軟な対応ができるようになったと成長を感じました。協調や計画性を意識するなど、社会においても必要な働きかけを学ぶことができました。

佐久間フィールド 大草 実優

私は、毎年11月に実施されるキッズフェスを中心に据え、それを1年間準備しながら活動を行った。キッズフェスから派生し三年次の夏には子供向けイベントを実施した。また、農村地域ということを活かし、プロギングや個人の探求活動、農業体験、市役所へのヒアリングなどの多種多様な経験をする事ができた。

とうもんの里フィールドワークはイベント企画・運営等をグループワークを中心に行っており、グループで活動していく中で、役割分担を明確に行い、時間の意識や各回の反省を徹底して行った。

また、総括として活動を行っていく中で、目的の共有、役割分担の配分、他団体との交流やその連絡といった今まででは身に付かなかったグループワークなどの経験もでき、自ら成長する事ができた。

とうもんの里フィールド 川野 桂汰



2年半の活動では、フライングディスク、インクルーシブサッカー、フットゴルフ、ストライダーなど普段なじみのないスポーツを通して地域の皆さまと関わってきました。御前崎市がもつ豊かな資源を活かし、スポーツを一つの手段として地域住民の皆さまと関わりを深めることができました。

同時に、私たちも実際にスポーツをプレイしたり、市の名所を訪れたりして、私たち自身が楽しむ活動も行ってきました。そういった活動によって私たちも御前崎市のことをよく知ることができ、理解を深めることができた一方、市民のニーズを考えることにも繋がったと考えています。

スポーツを通して皆さま、特に子どもたちが笑顔になる姿に私たちも元気づけられました。改めてここに感謝の意を表します。ありがとうございました。

御前崎市フィールド 石川 青空

私は、約3年間のフィールドワークを通して感謝の心を養えたと思います。松崎商店街では、主にパンフレット作りと、高校生の居場所づくりに関わりました。そこでは、多くの人と協力することの難しさと、何よりも町の方々の優しさに触れることができました。

活動の中で、肉屋や八百屋、高校生や役所の方等多くの人の協力があって、はじめてまちづくりが行われていくことを経験しました。高校生までの私は、町をどこか言葉の中でしか捉えておらず、まちには人の営みがあり、優しさがあることに気づけていませんでした。フィールドワークをとおして、「街」には人があり、思いやりがあることを知りました。

私にとってフィールドワークは、人々の優しさに触れ感謝の心を養えた貴重な財産となりました。

本当に、それぞれの営みがあり忙しい中で、静岡大学のフィールドワークに携わって頂けたことに、感謝したいです。

松崎町 商店街フィールド 佐藤 快成



2年半のフィールドワークから、地域の課題の本質を見つける力を身につけることができました。これは地域で活動する中で、さまざまな場所を調査することや、地域の住民の方と関わる中で、養われたものだと思います。表面的な課題は簡単に見つけることができるものの、なぜそれが解決されていないのか、という部分まではフィールドワークをするまで考えたことのない視点でした。ただ一方で、本質から解決することはとても難しいものであるとも実感しました。私たちの活動では、松崎町の観光について、2年半ではその本質を解決することはできませんでしたが、イベントを開催した際にいただいた地域住民の方のお言葉から、少しでも地域課題のためになる活動を行うことができたと感じ、貴重な経験となりました。

松崎町 観光と防災フィールド 桂木 健伸

私たちが「地域の課題を解決して住民の皆さんのためになることをしたいんです!!」と言っても、地域住民にとってそれはおせっかい、あるいは無関心。私たちが「ここは課題が山積している地域」と思い込んでいても、地域の人にとってそこはただの生活の場。多少不便なことはあっても、それが日常だからなんとも思っていない。実際にはこのようなギャップばかりだったように思う。そのような中でも自分たちにできることを追求して真摯に地域と向き合い、活動に取り組んできた結果、次第に地域住民の信頼を得られてきた実感がある。2年半という時間で特段大きな成果はあげることはできなかったけれど、どうしたら地域とつながれるのか、いかに信頼される人間になれるか、それを学ぶ機会をこのフィールドワークが与えてくれたのだと思う。これからもゆる〜く繋がりを広げて、東伊豆町のことが大好きな人を増やしていけたらと思う。

東伊豆町フィールド 山田 海斗



フィールドワークを通じて様々な人と関わることで、コミュニケーション力を成長させることができたと感じています。私たちは、伊豆半島の地域資源を活用してイベントを開催しました。イベントを開催するにあたって、イベントを開催する施設の方々、周辺地域の方々、協力していただいた企業の方々など、様々な立場の人と関わらせていただきました。イベントが関わる全員にとっていいものとなるようにするため、コミュニケーションを積極的に図ることを意識しました。そうすることでイベントを成功させることができたと考えています。フィールドワークで身につけたことを今後の生活においても活かしていきたいと考えています。最後になりましたが、イベントに協力していただいたふらっと月ヶ瀬の皆様、有限会社オートクラフトIZUの皆様、スルガ銀行の皆様、伊豆半島ジオパークとジオガイドの皆様にはこの場を借りて心から感謝申し上げます。

ジオパーク 教育フィールド 綿引 駿



私は、清水区小島町を拠点に、2年半活動してきました。活動初期の頃は、フィールドワークの方法や小島地域のことを全く知らず、ただ先輩についていくだけの受動的な活動が多かったですが、活動が続けていく中で地域との関係づくりや居場所の大切さを学び、3年生になってからの活動では主体的に取り組む事ができました。私達の活動が小島地域にとっていいものになっているのか不安になったり、間違った選択や失礼な対応をしてしまったり、失敗も多々ありましたが、参加させていただく活動団体の方々や企画・運営したイベントに参加してくださった方々は私達のことを温かい目で見守ってくださり、精一杯活動することができました。小島での活動は、素敵なヒトや美しい自然との出会いが多く、私達の学びを育ててくださり、お世話になった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。2年半のフィールドワークで得た経験を社会に出ても活かして、より一層地域社会に貢献していきたいです。

多世代の居場所づくりフィールド 吉田 美空



フィールドワークを通して、繋がり的重要性を学びました。学内地域連携拠点フィールドは他のフィールドと異なり、特定の地域にフィールドを持たず、学校をフィールドとしています。そのため、各フィールド間や学校と地域の懸け橋になるような活動を行ってきました。フィールド同士を繋げることの難しさを実感しながら、各フィールドの現状を把握してより良いフィールドワークを実施する方法を考えることができました。そして最後には、実際に伊豆に足を運び、地域住民の方々に我々学生が考える地域課題の解決策を提案したり、住民の方々が抱えている問題について話し合ったりし、地域とのつながりを築くことができました。自らが実際に地域に足を運び、地域とのつながりを築くことの大切さや感じることの多さを学びました。

学内地域連携拠点フィールド 金子 涼太郎

地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさんの声をご紹介します！

地域創造学環のフィールドワークは、多くの地域の方々にご協力をいただいています。
今回も、フィールド活動でお世話になっている方々から、これまでの活動についてお伺いしました。

※表記のご所属、お役職名等は2023年度のもの

清水港周辺地区フィールド

高まる学生の存在価値

地域では「学生がいるだけで元気になる」と言われ、学生への期待もあった。
ここ2年間で、地域課題の解決は「相乗り型から自立型」へと進化し、「学内連携・協働の取組」による活動の広がりを見せている。
今年は、昨年の「スマイルロゲイニング」を改善し実施。昨年参加した親子や協働の相手から「子どもとの接し方が素晴らしい」「とても元氣になれた」など高評価を得た。子どもたちも学生と仲良くなれたことがうれしそうであった。
まだ課題もあるが、学生の能力を発揮できるフィールドワークへと学生の存在価値がより高まっている。

有限会社都市環境デザイン研究所 代表取締役 木村 精治 様



庵原フィールド

これまでの庵原フィールドにおいては、学生が地域の方々とのコミュニケーションを積極的に取り、良い関わりを作ろうとした事や、ゆえに地域からも頼られる存在になりつつあった事を感じていました。
そして本年度も、地元「清水いはらフェス」に参加し健康ウォークを任されて実施し、好評のうちに終了しました。
そのような中で、今回、受付・案内・ポイント地点でのチェック等を行うにあたり、特にそのわかりやすさや楽しさにも工夫を凝らし、相手の立場を考えながら良いものにしていこうという想いが強く感じられました。参加者にもその部分は伝わるもので「楽しかった」という言葉と同時に、「頑張ってたね」と学生に声をかけてくれる方もいらっしゃいました。学生が自然なまま、地域に溶け込んでいると感じた時でした。

公益財団法人静岡市まちづくり公社
健康スポーツ課 課長 酒井 政幸 様



おまちフィールド

2023年は、5月のコロナ5類への引下げのもと、久しぶりにフィールドへ出での活動ができました。6月の春バルと11月の秋バルでは、SNSを活用した若年層への販促活動。さらに11月の秋バルでは、バルチケットを使ってバル店を巡り、バル体験動画を制作。「おまちバル楽しみ方ハツウビデオ」としておまちバル公式サイトに常時掲載しております。次年度はさらに稼働できるメンバー数も減りますが、SNSでの販促活動に特化し、悔いが残らないフィールド活動を実施いたしましょう!!

静岡おまちバル実行委員会 実行委員長 松下 和弘 様



浅間通り商店街フィールド

浅間通り商店街は「どうする家康 大河ドラマ館」の出現という一大事で、いつもとはちょっと違った一年でした。想像を超える全国各地からのお客様をお迎えし、はじめて訪れたという方もたくさんいらっしゃいました。
フィールドワークではじめて浅間通りをよく見てみたという学生さんの声をよく聞いてきました。ここはイベントやまつりによる特別な日を年に何度か持っています。限られた活動時間で、特別な日を想像するのは難しいかもしれませんが、浅間神社の祭礼などの特別な日にも興味をもってくれたことを嬉しく思いました。
総会での活動報告は、商店街組合員も刺激をいただきました。残りの時間は短くなりますが、よく知らなかったからこそその驚きや気付きを、ぜひ商店街にぶつけてください。フィールドワークが私たちも共に学ぶ機会になれば幸いです。

静岡浅間通り商店街振興組合 理事 原木 公子 様



焼津市浜通りフィールド

2023年の「浜通り夏のあかり展」はコロナ禍以前の規模で開催ができ、例年以上に多くの方にお越しいただき、大きな賑わいを見せることができました。
太田先生をはじめ学生の皆さまには事前準備から当日までご協力いただき、誠にありがとうございました。
浜通り地区の活性化には、このあかり展での賑わいを持続的なものにしていく必要があります。まちづくりを検討するなかで、学生の皆さまに参加いただけることは、地域の方にとっても新たな気付きや刺激を得る機会となり、活動の活性化に繋がると考えています。
これからも焼津市、そして「浜通り地区」の活性化に向けた活動にご協力いただけますと幸いです。

焼津市商工観光課 主査 望月 拓海 様



浜松文芸館フィールド

AIが発達する今だからこそ、あらゆる世代の人に自ら書くことを大切にしてほしいと考える浜松文芸館の活動に、若い学生の皆さんが参画していただけて感謝しています。夏、子どもたちの絵本やお話をつくる活動に寄り添って支援する姿や、学生さんが造形した作品の感想を子どもたちから聞き集める姿が、新鮮でとても素敵でした。秋、展示した造形作品と俳句をコラボする取り組みは、ハードルが高いかなと思いましたが、挑戦してこそ学べるわけで、まずやってみよう！という姿勢が皆さんの今後の成長につながると信じています。

公益財団法人浜松文化振興財団 浜松文芸館長 伊熊 敬一 様



佐久間フィールド

今年度は「秘密基地いもほり」でイベントを企画・開催してくれました。近くに生えている竹を使ったモルック作りといもほりの幕作りという、地域資源の活用と空間に加えるべきものは何かとよく考えられた企画だと思います。参加した子どもたちもとても楽しんでくれていました。イベントの企画から実施までお疲れ様でした。来年度も学生にとって学びがあり、地域との関わりを大切にしたいフィールドワークをしてくれることを期待しています。

浜松山里いきいき応援隊 金田 鈴音 様



とうもんの里フィールド

12月活動報告会がとうもんの里で行われます。一人一人が、自分の取り組みを発表するのですが、そこには「とうもん愛」が溢れています。
自分の力できることから始まった1年生。先輩を見ながら、それでも仲間として意見を言い、動き出す姿。受け止める先輩の気遣い。3年の歳月は、目を見張るくらい成長してゆきます。
そんな後輩たちが気になって、卒業生が現れます。4年生が、一緒になって活動します。あと一年、何を残せるだろうと議論を深める輪の中であって、この50人の歩みこそとうもんの宝だと誇りに思います。もう一年、頑張りましょう。

NPO法人とうもんの会 理事長 名倉 光子 様



御前崎市フィールド



御前崎フィールドワークは今年で6年目となりました。今まで携わっていただいた学生さんに改めて感謝いたします。

今年度は新たな取り組みとして、御前崎市振興公社も加わり3団体での企画・立案を行いました。その結果、障がい者も健常者もみんなが一緒に楽しめるサッカー教室に決まり、学生には当日の運営にも携わっていただきました。また、夏に行われたマリンスポーツフェスタにもお手伝いに来ていただき誠にありがとうございました。

これからも魅力あふれるまちづくりを目指し、連携していきましょう。

御前崎市役所 企画政策課 課長補佐 奥柿 敏之 様

松崎町フィールド

今年度は町職員の担当の変更もあり、皆さんの受け入れがきちんとできず申し訳なく思います。そんな中、元商店を活用し、地元高校生と共に、近所から不要品を集めて居場所づくりに取り組んでいただいたことにより、松崎町の多くの方々に静大生の存在を知ってもらえたかと思えます。

皆さんの活動が、松崎町に元気を与えてくれていることを誇りに思って、地域での活動を続けてください。

松崎町教育委員会事務局 齋藤 一憲 様



東伊豆町フィールド

今年度のフィールドワークもお疲れ様でした。

3年生の集大成となる東伊豆魅力発見大学校はこの地に新しい風を吹かせてくれる企画となりました。みなさんの取り組みを応援させていただく中で年々収穫できることが多くなり、下級生たちにプレッシャーが掛かりますが、2年生の来年度の活動もとても期待しています。

これまで通り積み重ねてきたものを大切にしながら活動していければ安泰だと思うので、東伊豆フィールドワークのラストイヤー盛り上がりやっていきましょう！

合同会社so-an 代表社員 荒武 優希 様



伊豆半島全域（ジオパーク）フィールド

複合施設「ふらっと月ヶ瀬」が、フィールドワークの一拠点となり、学生たちの目線でのイベント企画の実践や、地域課題を掘り起こしていくなかで、私たちも、多くの気づきと繋がりを得ることができました。学生たちの視点は、私たちの日常のマナー化を破り、新たな発見を見いだしてくれました。

今後は、自らの専門性を活かしながら、「地域づくり」へと発展していくことと期待しております。私たちも、また、ともに歩んでまいりたいと思います。

ふらっと月ヶ瀬 プラム 山崎 貴子 様



多世代の居場所づくりフィールド

小島地区フィールドワーカーの皆さん、今年も一年間ありがとうございました。

今年はどんな気づきがありましたか？どのくらい自分自身を試せましたか？

地域コミュニティには、いろんな人の「感情」や「思惑」そして「信頼関係」が交錯していて、把握や言語化が難しく感じられたこともあったのではと思います。

世代ごとの課題解決を考えることも大切ですが、もし一人でも仲良くなった大人や子どもがいたら、その人（子）の「幸せ」を願うところから考えて訊いてみると、糸口が見つかるかも知れません。「静大生」ではなく、お互い大切な名前を持った固有名詞の存在で向き合っていたただけなら嬉しいですね。

龍津寺 住職 勝野 秀敏 様



静岡大学 地域創造学環 2023年度フィールドワーク報告会

日時 2024年5月30日（木）10：15～14：45

場所 グランシップ 交流ホール

【司会、舞台係】

（地域経営） 3年生 松岡大輝

（アート&マネジメント） 3年生 石上すみれ、大木琴寧、小笠原凜

（スポーツプロモーション） 3年生 大石凜里花

※学年は開催時のもの

静岡大学 地域創造学環 2023年度フィールドワーク報告書

2024年5月24日発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 地域創造学環係

【報告会リーフレット、報告書表紙デザイン】

静岡大学 地域創造学環 アート&マネジメントコース 鈴木 唯心
